

なげなしの

かね





## まえがき

今回はまえがきが催促されなくて、「わあいやっためう」と抜かしていたのですが、脱稿寸前で督促が掛かってしまいました。ああ、逃げきれなかった。いつもならすばしっこく逃げ切っちゃうんだけどまあ…。

この本を手に取り、そして丁寧に前書きまで見てくださった読者の皆様、おはようございます。私は現代視覚文化研究会の会長の芝脇智将(じつそうのひと)です。ご覧の通りこのサークルの名前はすごく長く、大概の場合略されています。そう、「げんしけん」。

その「げんしけん」では何をしているかと言いますと、創作活動です。名前通りであれば現代文化について研究しているはずですが、そんなことは気にしてはいけません。文章を書いて会誌を作ったり、音楽を作ってCDを作ったり、イラストを描いてマンガを作ったり、プログラムを書いてゲームを作ったりしています。また有志が集まればTRPGが始まったりボードゲームが始まったり、突然難しい話が始まったりと賑やかなサークルです。

最近では会長の癖に幽霊部員に近い存在と化しつつ有ります。まあ体も老化の極みを迎えているというか、そういうのもあるのですが、お仕事も忙しかったりでなかなか時間が出来ないのですね。なんか企画をやつた気がするんですけど、もう忘れちゃいそうです。あ、ダメですね。

まあなんと言いますか、今年は一段と部員も増えてまして、部室も賑やかな感じになっています。部員が増えたということで、優秀な後輩たちの生み出す素晴らしい創作物も増えていくわけでして、ダメダメな僕のソウルジェムが濁る速度もスピードアップしております。優秀な後輩からの「進捗どうですか」が無いことが唯一の救いです。

こんなダメダメなおじさんがまえがきを書いておりますが、他の会員の皆様が生きたここから後ろのページは素晴らしい出来です。是非お読みください。

電子制御工学科 3年

芝脇智将(じつそうのひと)

# 目次

小説作品			
ねこみみの封印	TEXTER	4	
恋愛は大変	フランカー	8	
願いの鈴	若葉	12	
へいきん	ちげ	15	
美しい街	古月	19	
雨を被った双子	みのすけ	22	
夏に死ぬもの	箱庭氏	26	
天体観測	小刀	28	
雨上がりの送り傘	ツリウム	31	
あくまでねがいをかなえたはなし	キリギリス	35	
	イラスト		
	Taderen	40	
	ねこにゃん	41	
	Claude	42	
	ぶっちー	43	
	ちげ	44	
	Kaiwai	45	
	wolf	46	
	クロム	47	
	コラム		
	現視研紹介ムービー制作		48
	カードを高速回転させる講座		49

# 小說作品

## ねこみみの封印

作 TEXTER 絵ねこにゃん

「おはよー！」  
いつもの朝。登校中の私の耳に飛び込んでくる声はもちろん光の  
声。

「おはよう…光は相変わらずテンション異常だね。」

光はそのハイテンションを維持したまま、

「えー？秋のテンションが低いんだよー？」

光は大きさに首をかしげ、しかしすぐに元に戻っていつもの笑顔  
に戻った。

相変わらず、太陽のような笑顔だ。沈んでいた心も、少しずつ浮  
いてくる。

憂鬱な気持ちを取っ払い、私たちは二人で学校へと向かった。

二人で向かったせいか、朝のホームルームぎりぎりの時間だったが、それでも彼女はまばゆい笑顔を振りまいていた。私は…精神的に参ったというか、時間ぎりぎり間で間に合ったので、安堵のため息をもらっていた。

すぐにチャイムがなり、担任の先生が時間通りに入ってくる。名前は…忘れた。

「では、ホームルームをはじめます、…」

異様に暗い担任の挨拶。しかし、みんなを見回す視線が、一箇所で止まる。

「おい、青葉。その頭はなんだ」

少し怒りの入ったような声。いつもの通り、その先には光。

「見ての通りです！ねこみみです！」

無論返ってくるのは、場違いかと言いたくなるような、明るい声。

「ねこみみだと？学校をなめてるんじゃないだろうな？」

「もちろんです！」

—それはどっちのもちろんなのだろうか。

そして、このやりとりは毎日行われているんだから驚きである。私は改めてため息をついた。

「先生、ねこみみをつけてた方がかわいいと思います！」

こんな風に擁護する男子が現れるのも、いつものことだ。…毎回被らずに誰か一人が出るということは、担当でも決めているのかもしれない。

しばらく生徒の質疑（応答無し）が続いた後、先生はあきらめたか、教室を音もなく退出した。

なぜか起こる歓声も、記録済みの映像だ。

放課後になった。運動系部活の男子は教室に残り、着替え始めた。私と光は、カバンを簡単にまとめて、国際交流部の部室に向かった。既に部室には後輩も先輩も来ており、二人揃って「遅れました！」と簡潔に挨拶をした。

皆は笑顔で許してくれたが、この人たち、一体どのタイミングで集まってるんだろう？空恐ろしい。

しかし、まあ楽しいならいいか。無論、

さて、活動を始めるか。いよいよ私の本調子が出てきたようだ。

まずは発声練習だ！

「毎回思うけど、秋の仕切る国際交流部は運動部だよー！」

「知るかあ！」

私は自分が女の子だという自覚も吹き飛ばし、声をありったけ張り上げた。

「頼むからいつもの秋に戻ってー！」

結論。

後悔した。

のどが痛くて仕方なくて、今日中はまともに声を出せず、部活中もからかわれて涙目だった。

もうぶかついきたくないかもしれない。

とか思っていると、横から急に顔が現れた。私は思わず隣に倒れてしまった。

「よかったー。元気なさそうだったから、大丈夫かなーって思ってたんだよ？」

「大丈夫じゃないから…っ」

私は最後まで言う前に大きく咳をし、その痛みでもっと涙目になってしまった。

「ほらー。無理しない、無理しない。」

無理は禁物だよ？」

なんか悔しいーっ！でも言い返そうとしたらせき込んでうし、ストレスがガンガン溜まるーっ！

と物凄い表情であろう私を見て何を思ったか、光は私を横にし、その上に部屋にあつたひざ掛けをかけた。

私は、予想とあまりにも違う反応に正直驚いたが、私のことを心配してくれたのかな、とようやく結論に達する。

光。普通にしているても人気者だろうに、なんで二年間もねこみみを付けっ放しなの？

繰り返される毎日の中で、こんな風に考えたのは初めてだった。

「おっはよー！」

いつもの朝が始まる。

いつもの朝礼が始まる。

そして、いつものように授業を受け、友達としゃべり、部活をする。

でも、これでいいのかな。

光は受け入れられてる。それどころか好かれてる。

でも、私には分からない。彼女はねこみみに依存しすぎてる。

中学時代何があつたかは知らないが、高校にああいったアクセサリーは派手すぎるし、先生を誤魔化しているのは奇跡だと思う。

でも私は聞いたことがない。

—なんでずっとねこみみを付けっ放しなの？きつと怖いんだ。

そのねこみみには、なにか、こうー封印というか、込められた思ひみたいなものを感じたから。

拒絶されるのが怖いだろう。

そんなカゲロウのような日の一日。

その日の朝、待っても彼女は来なかった。

学校に行っても、まるで前からいなかったかのように、誰も座らない机が、寂しそうに置いてあるばかりだった。

クラスも静観としている。まるでお通夜の日のようだ。

私も絶句したまま、胸の中で迷走する言葉たちを抑え込んだ。私は彼女のことが心配だった。

最初から心配だった。

いつかこんな日が来るとは知っていた。でも実際に来た時のその気持ちは、想像できなかった。

華に欠けた教室で、今日もまた、暗い授業が始まった。

帰り道。

すっかりオレンジに染められた住宅街を、一人で歩く。

心細い。

失って初めて大切さに気付く物。

そんなもの、数えきれないくらいある。

でも、失う前に知っておきたかった。

だって、それが人間だから。

何分歩いただろうか。私の足は自然と速くなり、その上、彼女の家に向かっていた。

そこには、想像だにしない光景が広がっていた。

大体周りと同じくらいの大きさの家。  
しかしそれは、一部が灰と化していた。

俗に言う火災だ。すでに鎮火された後らしく、消防車も小さいものが一台しかなかった。

そして、その道路を挟んだ向こう側。

そこに、ねこみみのない光がうずくまっていた。

私は半ば無意識に光に近づいたが、何と話しかけてよいか、見当もつかない。

光は泣いていた。私にはそれを、黙って聞くしかできなかった。

「どうして？なんで？」

どうしてこうなるの？

皆に嫌われないように、皆にいじめられないように

頑張ったのにさ？

なんでこうなるの？」

まるで誰かに聞かせるようにループする彼女の言葉は、私を勝手に動かした。

「何言ってるの？」

光は驚いたらしく、そのまま道路に倒れてしまった。

即座に抱き起こす私。

「なんで？じゃないでしょ？」

あなたが別に放っておいても良いような程度の人なら、皆愛想を尽かして、なんだ、ねこみみの強がりか、と思うよ？

でも違うでしょ？違うよ。

光はさ、心の底から優しいじゃん。

いじめられてたんでしょ？だから、いじめられる人の気持ち分かるし、すべての人を大切にできる。

からさ…自信を持ってよ…

学校に戻ってきてよ！

皆待ってるからさ！」

今伝えられる、精いっぱいという言葉だった。

それに、最後の方は涙声になって、聞こえなかったかもしれない。  
でも今度は、光は顔を上げたまま涙をこぼした。  
私は光を抱きしめ、しばらく泣き続けた。

「あなたの長所はねこみみなんかについてないんだから。」

「おつはよー！」

最早定番となりつつ…いや、なっていた挨拶。

今日の光はねこみみをつけていない。でも、その笑顔は相変わらずの太陽だ。

その目には、涙をぬぐったような跡があるが、あえて触れない。

「…ありがとう、教えてくれて。」

失ってから気付く物つてあるけれど、本当だね！

私はみんなの信用を信用してなかった。

でもさ、私は気づけたから。」

彼女は私に向かって、とびきりの笑顔で言った。

「教えてくれて、ありがとう！」

私も自然と笑顔になった。

「さあ、みんなの元へ、行こうよ！」

その後、教室で歓迎のような拍手が起こったのは説明する必要もないだろう。

終





## 恋愛は大変

フランカー

皆の通う学校に有名人はいないだろうか？別に天才子役だとか、若くして飛び級でアメリカの大学に行ったとかそういう有名な人じゃない。例えば家の高校の有名人なら……そうだね、お嬢様だろうか。

彼女はお嬢様としてこの学校で知られている。誰が見てもわかるような黒い高級車に乗って登校しているからだ。しかし車で登校するだけ家から遠いのか、彼女の家を見たことがある者はいない。それとも車で登校してこそお嬢様という奴なのだろうか、見当もつかない。

別にこの学校は特段賢いというわけでもなく、普通の人からはお嬢様という敬遠されそうなものだが、そうだったことはまったくない。というのも彼女の喋り方、振る舞いは僕たちのそれとなら変わり無い。むしろ彼女のほうが気さくなくらいだ。それでなんで僕がこんなことを思い返しているかというと、

「そ、それじゃちゃんと聞いてね……君のことが好きです」

僕は、そのお嬢様にたった今告白されているからだ。嬉しいというよりも何故？という感情のほうが大きかった。もちろん嬉しいが、いくら普通に接してくれると言っても彼女はお嬢様だ、勝手な想像だがお見合いとかそういうものがあるものと思っていた。ああ、彼女が涙目になってきた、でも返答は決まっていた――

「あ、ああ！ えーつと……よ、よろしく？」

ほとんど涙目でプルプル震えながら返事を待っていた彼女に、まるで男らしくない返事をしてしまったが、彼女はパッと顔を明るくし、ホッと胸を撫で下ろした。

「よかったあ……断られたらどうしようかと」

「いや、ほとんどの人は断らないと思うけど？」

「？ ……やっぱり君は優しいね」

なぜこれで僕が優しいってことになるのだろう。

「じゃあ、明日私の家に遊びに来てね！」

そんな疑問もいきなり家に誘われるという事態に吹き飛んだ、彼女は呼び止める暇も無く僕に連絡先を押し付けて走り去っていった。仕方ないと後ろの茂みに目配せすると、友人がガサガサと音を立てて出てきた。

「おっと、ばれていたか……おめでどう、つていえないのかね？にしてもお前意外と勇氣あったんだな」

なんのことだ？と問いかけなくても怪訝な顔をしている僕から読み取ったのだろう、友人は言葉を重ねる。

「お前知らないのか？まあいいか」

「気になることを言わないでくれよ」

お嬢様ってことは知っているけど他に何かあるのだろうか、だがお嬢様以上の秘密ってなんだろうか？まああまり驚くことはないだろう、そう決め込んで家に帰ろうとした。

「デートの感想聞かせてくれよう」

「はいはい」

と邪険に追い払ったが、初回のデートはある意味思い出に残るものとなった。

なぜ、なぜ僕はこんな場所に立っているのだろうか。

彼女にメールで送られてきた場所に立つとそこには大きな和風の屋敷があった。それはまだいい、彼女はお嬢様だしなんの問題もない。だがその門に問題があった。

『〇〇組』

彼女の苗字が入っているがどうみてもその筋の人の家だった。

別に怖いというわけではなかった、たまに町の人を呼び寄せてお祭りや餅つきをしたりするという一般的イメージとはかけ離れたことをしていると風の噂で聞いたことがある。

などと色々考えており、中タインターホンをおせすにまごまごしているところから強面のお兄さんが出てきた。

「おい兄ちゃん、なんか用か」

これでも丁寧なほうなのだろうがどうしても辣み上がってしまう。

「こ、この娘さんとデ……遊ぶ約束を……して……」

さすがにデートとはつきり言うとは恥ずかしいし何より怖いので言葉を選びながら告げると、お兄さんはクワツ！と目を見開き

「あんたがお嬢の恋人か！」

と叫ぶやいなや僕の両肩をむんずと掴み屋敷の中に引っ張っていった。

「お嬢！ 来ましたよ！」

はいはい。と奥からお嬢様……いや、お嬢が出てきた。ここで昨日彼女が心配していたことと、友人が隠していたことがわかった。よく見れば僕の後ろでニコニコしている強面のお兄さんも毎日彼女を送っている車の運転手だ。

運転手兼ボディーガードなのだろう、この学校に入学したころは彼女が見えなくなるまで校門から見送り周りの生徒を威圧していた。それでも次の日はなぜかシユンとした様子で、周りの生徒に睨みを効かせるようなこともなく見送っていた。皆を威圧するなどでも彼女にお説教でもされたらどうか。その時はボディーガードで大変だなあ、とは思っていなかった。

「さあ入って入って。一番奥がお父さんだよ、お母さんは料理中」

促されるままに部屋の中に入っていく。……なんで親御さんに挨拶することになったんでしょうか、強面のお兄さんがいっぱい居るんですが、奥に居る人なんてどう見ても親分的な人でしょう。

「……坊主」

「は、はい！」

「娘を幸せにする自信はあるのか」

「ちよつと、お父さん、やめてつてば！」

もう緊張がピークに達しているところ助け舟を出してもらった、

おじさんはそうか、というと渋々引き下がった。娘には強く出られないのだろうか？

「じゃあお父さん、私お母さんにも会わせるから」

ムスツとしたおじさんが頷いたのを見届け今度は台所に連れて行かれてしまった。

もう、なにがなんだか。

「あらあら、無理に来てもらってごめんなさいね」

「い、いえ。そんなことないです」

打って変わっておばさんはほんわかとした人だった。なんで結婚できたのかとても気になる。

「もうすぐご飯できるから、皆で食べましょうね」

「あ、お言葉に甘えさせていただきます」

作っている量から察するにお兄さんたちも一緒に食べるんだろうな……。

「いやーありがとう！ お疲れ様」

彼女はそういうと自室に通してくれた。今まで入ったような和室ではなく、女の子の部屋だった。さつきまでの緊張とは別の意味で緊張してきた。

「ちよつとまつてね」

そういうとなにやら部屋の押入れでござと何かを探し始めた。あつた！と声に喜びを滲ませなにかを手に握ってこちらに向けた。

銃だった。

「うええええええええええ！ やめて許して!?!」

「あははははは！ 偽物よ偽物！ こんなばれやすいところに置くわけないじゃない！」

びっくりした、本当にびっくりした。場所が場所、親御さんが親御さんだけに本物だと思ってしまった。これが偽物ならほかの所に



本物があるのだろうか……などと考えをめぐらせていると彼女が持っている銃を掲げて饒舌に話し出した。

途中からほとんど僕の理解の及ばない話をしだしたが、要約すると彼女は銃が好きなのだそうだ。最初に持ち出した拳銃だけでなく、ガチャガチャと掘り出しては色んな銃を見せてくれた。

「うーん、さっぱりわからない……」。

色々触ったりしてみたものの、名前だとかなんでこんな形をしているのだとかはさっぱりわからなかった。ふと気づくと彼女が僕の顔を覗き込んでいた。

「どうしたの？」

「……君は私の事、変な子、って思わないの？」

「なんで？ 面白い子だとは思うけども」

「だ、だってこんな趣味っておかしいと思わない？」

「趣味のこと？ 彼女の趣味を悪く思うわけがないじゃないか、僕自身これに興味あるし」

そう返すと彼女は満面の笑みで僕の背中をバンバンと叩いてきた。「そっか……そっか！ やっぱ君でよかった！ 大好き！」

そんな言葉を聞けば本当なら少し位顔を赤くするものなのだろうが、僕はというと飛びついてくる彼女の後ろ、部屋のふすまを見て固まっていた。

あらあらと笑うおばさん、腰にさした刀のようなものを握り締め鬼のような形相でこちらを睨むおじさん。スツとおじさんが消えたかとおもうと、次の瞬間ふすまが蹴破られた。おじさんは勢いそのまま僕に飛びかかろうとしたが、そんなおじさんを止めようとする強面のお兄さんもろとも部屋に雪崩れ込んできた。

「貴様あ！ もう手を出したのか！」

「あらあら、お父さん邪魔しちゃだめですよ」

「親分まずいですよ！」

「ちよっとお父さんそういうのじゃないってば！」

もう、なにがなにやら。お嬢様だと思っていた彼女が実はお嬢で

目の前で刀を振り回すおじさんから僕を庇おうとして僕に抱きつき、余計におじさんが暴走する。

ああ、まったく面白いなあ、でも恋愛は大変だなあ。彼女が強く僕を抱きしめるあまりだんだん意識が遠のいてきた。

さすがにこれを毎日は大変だ、きゆう。

了

## 願いの鈴

若葉

俺の通っている大学にはある噂がある。

鈴を鳴らすと願いが叶う、というものだ。

鈴ならなんでもいい、というわけではない。その鈴には、朱で刻まれた呪文のような模様が入ってるらしい。もちろん噂なのでよくわからないが。

今、噂の鈴らしきものが目の前にある。

俺はこれを鳴らそうか悩んでいた。特に叶えたい願いはないが、好奇心で鳴らしてみたいと思っていた。

「うーん……あつ」

しばらく悩んでいると、ふとした拍子に鈴を落としてしまった。

「よいしょ、と」

鈴を拾い上げると、小さくシャラン、と音が鳴り、突然鈴が光りだした。

「うわっ!？」

俺は咄嗟に目を瞑った。

光はすぐに収まった。俺はおそろおそろ目を開けて、絶句した。

「……………」

そこには少女がいた。

背に届くほど長い黒髪には青い花の髪飾りがあしらわれていて、服は緑のオールインワンで肩には緑のベールがかけられている。

しかし、最も目を引いたのは耳だった。おおよそ人間とは思えないほど尖った耳は、ファンタジー小説に出てくる妖精を連想させた。少女はこちらをジーンと見つめてきた。そしてきよんとした顔で言った。

「願い事は言わないのですか？」

一瞬何を言ってるのか理解できなかったが、ふと噂を思い出す。まさかと思ったが、鈴が鳴り、この少女が現れた。信じられないが噂は本当なのだろう。不慮の事故とはいえ、鳴らしてしまった以上何か願い事を言わなければならぬのだろうか。

「……今言わないとダメか？」

「いえ、保留という形にされた方も多いです。その後すぐに願いを言った人が多かったですが」

その言い方はつまり、多くの人間の願いを叶えてきたことを示していた。

「叶える願いを百個に増やしてくれ、なんて方もいましたね。流石に断らせて頂きましたが」

そんなことを言ったやつがいるのか……

「じゃあ、とりあえず保留で」

「かしこまりました」

しかし、少女は消えることなく俺の前で佇んでいる。てっきり鈴に戻るものだと思っていたが、どうやら願いを叶えるまでは鈴に戻れないようだ。

少女は「願いが決まるまでここに泊めていただけませんか？」と言ってきた。

今更だが、少女の身長は俺より頭一つ分低いくらいだ。当然少女はこちらを少し見上げることになるので、視線がなんとも断りづらい。

まあ、そうでなくとも追い出そうとは微塵も思っていないが

「不束者ですがよろしく願います」

こうして、俺と少女の同居が決まった。

同居から一ヶ月ほどが経った。

親の仕送りがかなり多かったこともあって同居は何も問題がなかった。名前がないと呼びにくいので、安直だが鈴子と呼ぶことにした。いつの間にか近所のおばさん達と仲良くなっていたときには驚いたが、鈴子曰く「上手く誤魔化してます」ということなのでよしとしよう。

あれ以来鈴子は願い事を催促しなくなったし、俺も特に叶えたい願いが見つからなかった。

鈴子は大学のことや過去の思い出を聞きたがったので話したりした。鈴子もまた、これまで叶えてきた願いのことやその結果について面白おかしく話してくれた。

このまま、ずっとこんな時間が続けばいいのに、と思ったこともある。だけど、それが無理だということは薄々わかっていた。

願いを叶えなければ鈴に戻れない。

それはつまり、願いを叶えたら鈴に戻ってしまうということだ。

仮に、これからも一緒に暮らしたい、という告白紛いの願い事を言つたとしても。おそらくだが、俺の手に鈴が残るだけだ。一度願いを叶えた人にはもう叶えないと言っていた。それは困る。

鈴子との生活に慣れてしまった俺は、もう一人暮らしは出来ないだろう。それほどまでに俺は鈴子に惹かれていた。

さらに一ヶ月が過ぎた。

俺は鈴子と外に出るようになった。初めは周りの視線が気になっていたが、次第に慣れていった。

「賑やかなところですね!」

俺たちはゲームセンターにいる。鈴子は初めて来たらしく、小さい子どものようにはいしゃいでいた。

「こ、これは……!」

興奮した様子で辺りを見回っていた鈴子が、あるゲーム機の前で

立ち止まった。

「ああ、これはJEOキャッチャーだ。そこにあるボタンでアームを操作して中の景品を取るゲームだ。やってみるか?」

そう言つて俺は百円玉を入れ、簡単な操作方法を教えた。

ちなみに、俺はこの手のゲームはしたことがない。書いてある通りの説明をしただけだ。

犬や猫のぬいぐるみがちやごちやと置かれているなか、鈴子が狙ったのは犬のぬいぐるみだった。横から見ると位置を調整したりしている。

「取れました!」

鈴子は本当に初心者?と疑うほどのテクニックでぬいぐるみを取つた。それも一回で、だ。

「本当に初心者かよ……?」

「もちろんですよ」

それから俺たちはレースゲームをしたり、リズムゲームをしたりして、有意義な時間を過ごした。

「今日は楽しかったか?」

「はい、とても!」

笑顔でぬいぐるみを抱き締める鈴子の姿は可愛らしかった。

俺は悩んでいたが、意を決して伝えることにした。

「鈴子」

「なんですか?」

深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。

「願い事、決まったよ」

「……………」

鈴子は何も言わなかった。

「俺は鈴子のが好きだ!だから、これからも一緒に暮らしたい!」

言いきつた。もう後には引けなかった。

「……………」

鈴子はじつ、と俺を見つめていた。

やがて、鈴子はポツポツと話し始めた。

「私は、誰かに優しくしてもらったことがありません。私自身、それは気にしたことはありませんでした。それが当たり前だと思っ  
ていましたから……」

鈴子は一区切りおいてまた話し始めた。

「ですが私は、あなた様と出会って優しさというものを知りました。人ではない私を、人として扱ってくれたのはあなた様が初めてです。私はもう、これまでの様に淡々と願いを叶えることは出来ないでし  
ょう」

それは何となくわかっていた。鈴子が話してくれたことは願いの内容や叶えた後のことばかりで、相手との思い出は話さなかったからだ。

「あなた様の願いを叶えることは可能です。しかし、私は人としての姿を保てないでしょう」

「それでも構わない。一緒にいてくれないか？」

これは紛れもない、俺の本心だった。

「ありがとうございます。……少し、耳を貸していただけますか？」

「ん？……………」

鈴子はそつと、俺の耳元で囁いた。少しくすぐったかったが、鈴子の言葉でそんな気持ちも飛んでいった。

「では、また会いましょう。あなた様と過ごした時間は一生忘れません」

鈴子がそう言うと、途端に眠気が俺を襲った。

待ってください！

その言葉は口に出すことが叶わず、俺は意識を失った。

「っ!? はあ、はあ……」

目が覚めると俺は自宅にいた。未だに頭がボー、とするが、昨日のことを思い出すに連れて意識がはつきりとしてきた。

「鈴子!? いるか!？」

俺は飛び起きて家中を探し回った。

居間、洗面所、風呂場、玄関……

「いない……」

とうとう探していないところは鈴子の部屋だけとなった。

「鈴子、いるか?」

普段は絶対に入らないが、そんなことに構っていられるほど冷静ではなかった。

部屋はきれいに整頓されており、鈴子らしいと思ひ少し笑ってしまった。

ふと、机の上に目をやると、犬のぬいぐるみが置いてあった。首には見覚えのある、紅い模様が入った鈴が付けられていた。

「鈴子……」

昨日鈴子が言った言葉を思い出した。

「『悪魔は契約を守りますよ?』か……」

鈴がシャン、と鳴った気がした。

了



## へいきん

ちげ

日本にローザックという男がいた。いや、以前は日本国だった場所といった方が正しいだろう。現在は日本という国はなく地域、地方の、東京や大阪といった名前だけが残っている。ローザックがいるのは京都の自宅だ。毛布が乱雑に置かれた、シーツにシワが目立つベッドに横たわる。自分で植えた窓の桜を横目に、父親に言われた事を思い出していた。

ローザックの父親は日本人とイタリア人のハーフだ。母親はややこしく、エジプト人とアメリカ人とインド人と中国人の血が流れている。一昔前まではこんなややこしい血筋は珍しかったらしいが、グローバル化が進んだ最近では逆に混じり血の少なさを珍しい話だった。それでも簡単なほうなのだ。DNAを調べてもわからないほど血が混じっている人もいるらしい。

また、昔それぞれがそれぞれの国で話していた言語、文化、環境、その他様々なものがいつの間にか自動的に平均化し、現在では外国人という考え方は消えてしまった。言葉に関しては、英語がベースになっている定められた標準言語に、方言のような形で、昔の多様な言語の面影が少し残るほどであった。すべてが等しく、平和に、平均的という流れは、当然のごとく以前の特徴を削っていくことになったのだ。だがそれは経験による知識ではなく、全てローザックが中学の時の授業や、テレビなんかで得た知識だった。

父親に言われたのは結婚についてだった。結婚なんて考えたこともなかった。確かに女性に興味を持った頃もある。だがそんな欲求はいつの間にか薄れてしまった。それがいつかは把握しかねるが、他のものに心を奪われてしまったのだ。それは恋でもなく、趣味でもない……日本という国だった。今は日本人という純粋な人種はおろか、歴史的建造物や文化など、昔そこに確かにあったとされるも

のが消えかけている。だが、彼は歴史の教科書やテレビ、インターネットで見たその雰囲気が好きだったのだ。彼は時代劇を見て忍者や侍や日本の人情を知り、ネット上に上がっている大昔のテレビ番組を探し出しては日本語を学んだ。

仕事は途中でやめてしまった。仕事と言ってもやりがいなどなかった。機械が雇用人であり機械が全てで、それに使われるだけだった。効率を計算したコンピュータがやれといったことをする。それだけのことにやりがいを感じる訳が無い。世の中でやりがいを見いだせるのは創作家だけだ。

それはもう周りからは変人扱いされたものだ。そりゃあそうだろう、恋人も持たず、自作の手裏剣で遊んでいたのだから。

そんなこともあって、やはり何度言われても結婚を考える気は起きなかつた。今、世界で起きている人口減少を抑えるための、マニユアル化された子作り、という仕事としてしか捉えることができなかった。もつと面白いことはないかと、もつと心を震わせることはないかと、そう思っていた。そして今日も彼はネットの情報を目でなぞるのだった。

ある夏の初めのことだ、そろそろクーラーもつけていい頃だろう。だが、見ると半年分のホコリや汚れが溜まっている。やらなければならぬ仕事が増えすぎてしまったようだ。残念ながらこの古いエアコンには自動掃除機能がついていないのだ。新しいものを買いたいが、そんな予算も気力もない。だからといって掃除をするのも面倒で、しばらくは手をつけないことにした。

だがその考えが甘かつたことを一週間後に悟ることになる。部屋は熱気と湿気でむせ返り、マウスを握れば手汗が吹き出してくる。ついに熱でコンピュータに常時危険通知が表示される始末だ。

この温度で昔の人はどう生活したのだろうか。疑問に思ったローザックは陰るコンピュータに無理を言わせ、昔の暮らしの知恵について調べることにした。

ローザックは驚いた。五百年以上前であるにも関わらず、科学的な根拠で説明がつくような、経験による優れた知恵を彼らが持っていたことに。水撒きや簾はもろろんのこと、家の形や素材を工夫すること、そして暑さを楽しむという発想に舌を巻いてしまったのだ。興味を持ったローザックは庭に水を撒き、すべてのドアや窓を開放させた。そしてボロボロになった敷物を取り出し、簾のように窓のひさしにかけられるようにした。また、荒れていた庭に木を植え、ガラスのコップと金属のスプーンで風鈴を作った。そして様々なことを調べ、それをアレンジして実践していった。それは彼にとつて新たな発見があり、刺激的でとても好奇心をくすぐる楽しいものだった。そしてそれは彼に季節感を楽しむという日本人独特の感性が宿った瞬間だった。

彼の生活は劇的に変化した。気化熱の原理による涼しげな風と風鈴の音が、家の中を吹き抜けるようになり、あんなに暑かった室温は徐々に下がっていった。外に出る時も車には乗らず日傘を作つて街中を歩いた。交通量の多い車道とはうって変わつて歩道には人ひとり歩いていない。横を通る車からは異物を見るような目で見られるが、ローザックはそれでもよかつた。自分は他人に迷惑をかけていないし、なによりこれが楽しいのだ。車に乗つていては見えなかつた影で休む猫や、アスファルトを押し破つて生える隅っこの雑草を見て、色んなことをゆつくりと考えることができ、心が豊かになる感動を覚えた。

だがローザックが変わつていくのと平行に人との関わりは薄れていった。オープンでフレンドリーな人情を是非身につけたいと思えば思うほど、人からの変人扱いがひどくなつた。

なぜだろう。自分とは違う、あるいは常識とは異なる、またあるいは平均的でないものを嫌い、理解しようとしなないのはなぜなのだろう。それが時代的な変化によるものならばいつからのことなのだろうか。もしそうだとするならば、それは進化ではなく退化だろう。人は進化を捨て、機械に任せて生ぬるい環境でぬくぬくと、大きな

刺激なく生活しているのだ。

ローザックは人との暖かい関わりを持つことを諦めなかつた。ブログやSNSを毎日更新し、多くの人に見てもらえるよう工夫しながら、魅力を伝える努力をした。すると、その真新しい投稿に興味を持った人達がローザックに返信し、少しではあつたが人とのやり取りを持つようになった。それはローザックにとつてはひどく嬉しいことだった。それもあつて留まることなく毎日コツコツと努力を続けていけたのだ。そしてローザックの周りには数人の仲間ができていた。

「なあ、みんなであつて日本食店で、食事でもしないか？」

ある日、いつもよく話しているネット上の仲間からそうメッセージが来た。そのグループ内チャットでは既に話が盛り上がつていた。話は次々と進み、結局、以前ハチ公のあつた場所の位置情報を共有して集合場所となつた。ローザックにも初めての東京である。いろいろ不安なこともあつたが、食事会の当日、ローザックは期待感を胸に出発するのだった。

二時間程でリニアは東京についた。

「早すぎたかな」

何もする宛がないローザックが、仕方なくじつと集合場所で待つていると、ひとりの女性が話しかけてきた。

「ローザックさん……ですか？」

まさか女性に話しかけられると思つていなかったローザックは、何事かと目をパチクリさせた。

「あ、私スファンつています。えつとハチ公前……」

この人は確かにあのグループにいるネット仲間の一人だ。男性ばかりだと思つていたローザックのグループイメージは崩されてしまつた。

そこにスラッとした長身の男性と、肌の黒いメガネをかけた男性が、二人で話しながらこちらに向かつてきた。

「あれ、女性もいるの？」

どうやら男性グループのイメージ崩壊はローザックだけではなかったようだ。そしてワイワイ雑談しながら待つて数分後、杖を持った柔らかな雰囲気のおじさんが歩いてきた。

「あらら、僕が最後だったかー」

そう言うおじさんは陽気に笑った。

おじさんの本名はカートさん、だそうだ。チャット内ではマルオというペンネームで話していた。これから行くレストランはカートさんが紹介してくれたものだ。

「少し遅くなっちゃったかなー？ ごめんよ。時間だしそろそろ行こうか」

カートさんはそう言うのと、こつちだよと指し示した。そういえば、この会合を開こうと言ったのもカートさんだった。割と近くだと言っていたが、どんな日本食が食べられるのかは着いてからのお楽しみと言って、教えてはくれなかった。

出発してから数分後にはレストランについた。マンションの一階部分の小さなスペースに引戸があり、のれんがかけられている。この店構えはレストランと言うより、「料理屋」とか「食事処」のような日本風の呼び方のほうがいいだろう。

「古き日本の味、お好み焼きってぱん屋……よくこんなところ見つけましたね」

「いや、このマスターと昔からの付き合いなんだよ」

そう言うおじさんはガラガラと引戸を開けて中に入った。

「よう、やっさん。来たよ」

カートさんはメンバーに中に入りなよと、のれんに中から手をかけて僕らを招き入れた。

「へい、らっしやい」

ハチマキをまいたマスターが笑顔で汗を拭いている。店内はカウンター制で、テーブルに長く大きな鉄板がついている。外見のイメー

ジより店内は割と明るく、暖かい色のLED電球が昭和の雰囲気を醸し出していた。

「おお……」

メンバーは時代を飛び越えたような感覚に思わず感嘆の声をあげた。

「珍しいだろう？ こんなボロ屋。まあ、座ってよ」

やっさんと呼ばれていたマスターは自嘲気味にそう言い、氷いっぱいグラスを差し出す。メンバーはそれぞれがそれぞれの思いで興奮していた。木や人の温かみを感じられるこの空間は昔のドラマでしか見たことがなかったからだ。カウンターの丸椅子に座ったメンバーにおしぼりを渡すマスターは、次にテレビのニュース番組をつける。店内に響くアナウンサーの声が、唯一ここはリアルタイムの現実だということを語っているのだった。

「……じゃあ、あれを」

カートさんは常連なのだろう。ローザックは、お好み焼きでも頼んだのかと思っていた。だが出てきたのは、牛乳のビンに入った謎の緑色の液体だった。

「これは……？」

「……まあ飲んでみなさい」

飲んでみると、ほろ苦い甘さの香りが広がる。

「これは……抹茶ミルク？」

「ん、えーと……」

カートさんは答えようとしなかった。ローザックはなにか変な事を言ったのかと一時焦ったが、この味は幼い頃の懐かしい京都宇治の味。間違いない。今やもうその数は少なく、貴重なはずだ。

「……もうすぐなんだ。……テレビを見てごらん」

急にカートさんは深刻な顔でそう言った。メンバーは一斉にテレビを見る。何ら変わりない液晶パネルだ。何がもうすぐなのか、そして結局これは抹茶ミルクなのか。ローザックは何がなんなのかわからなかった。

だが、そこに一つの変化が起こった。テレビの画面が急に暗くなり、接続が切断されたという表示がでた。その変化がドミノ倒しのように次の変化をよぶ。氷のグラスがカラカラと小刻みに震え、その振動に丸椅子も共鳴するようにギシギシと鳴り響いた。

「地震だ！しゃがめ！」

叫んだが、それに被さるようにカートさんの声が響いた。

「いや、机にしがみつけ！」

訳が分からず言われるがまま、突つ伏すようにテーブルの角と鉄板の淵にある出っ張りを掴んだ。その直後、グルグル回転するような落下感と、加速度的な遠心力に襲われ、座っていた椅子は壁にぶつかって転がっていった。

気がつくまで荒れた店内にしゃがみこんでいた。全員呆然として訳が分からずにいる。そこにカートさんが咳いた。

「小物類は片付けておくべきだったね。こんなに揺れるとは……」

「なんなんだ今の……」

ローザックは聞いた。

「まず謝らなければならぬ。ごめんなさい。話す時間が思ってたよりなかったんだ。とりあえず外においでよ」

そう言つてカートさんはのれんをくぐる。

言われて外に出てみると、炎天下の中、なんと人が歩いている。

日傘を差す女性、短パン半袖Tシャツの子供たち、汗を拭くサラリーマン。そしてどこか聞いたことのある言語が飛び交う。

「日本……なのか……」

「そう、日本さ。改めて自己紹介しよう。私は研究者であり、哲学者のアーロン・カートだ。言ってみればこのボロ屋はタイムマシンみたいなもんさ。どうだい乗り心地は最悪だろう？ 酔い止めを飲める時間があつてよかったよ」

なるほど、さっきの抹茶ミルクは酔い止め入りか、とローザックは特に重要でないことを思いながら、自分の置かれた非現実的な状

況が、心をひどく揺さぶっていることを感じていた。

「えっ……」

「まじかよ……」

メンバーが現実を再確認しはじめたところでカートさんは続ける。「まあ驚くのも無理もないよね。ところで、廃日本戦争は知っているだろうか？ その以前から実は日本は軍事的な準備を始めていたんだが、それを察知したある国が、日本に戦争を仕掛けた。それに日本も戦闘機を出して対抗した。ここまでは歴史で習ったかな。戦闘機や戦艦の性能は確実に日本が上だったんだ。だから周りの国は心配してなかったのだが、日本は押されていた。理由は簡単だ。実は日本は相手機の一機も撃ち落とすことは無かった。一隻も戦艦を沈ませなかった。相手を傷つけることなく抵抗し、朽ちていったんだ」

「……え、それじゃあ日本は平和主義を貫いたのか？ 戦争をしたんだとしか習ってない」

「僕は昔アメリカの資料館からその情報を得たんだ。今はもうほとんど詳しく知る人はいないよ」

「……で、それがなんなんだ？ この目の前の状況を俺達はどう受け止めろつて言うんだ？」

「僕らの時代は、もう純血の日本人はいない。その上、日本人の魂もない。心もない。私は日本人が好きだ。尊敬している。愛している。その度合いは違えど、ここにいるみんなもそうだろう？」

メンバーは黙って頷く。

それを見てカートさんは満面の笑顔でこういった。

「なら、僕達で平均化された未来を変えに行こうじゃないか」

続

## 美しい街

古月

新しく引越してきたこの街は、とても住みよいところだった。主人の職場にも近いし、ちよつとした買い物やお役所の手続きにも便利な場所だ。これから生まれるかもしれない子供のために、良い学校があつて、良いお医者様がいる街を探した。

ご近所さんもいい人ばかりだ。お隣の老婦人には越してきたばかりの頃にとてもお世話になつた。町内の方々への顔合わせにまで付き合つてもらつて、同じ年頃の友人もできた。

そして極めつけは、美しい町並みだ。ちよつとおしゃれな家や、豪奢なお屋敷が品よく並んでいる。街ぐるみで清掃業に力を入れていて美化部隊まで組織しているらしく、道端にゴミが落ちていないなんてことはありえなかつた。

なんていい街なんだろう。私はすぐにこの街が好きになつた。引越してきてよかつた。

けれど、何一つ欠点がない、ということにはなかつた。私とその異変に気がついたので、越してきてから二月が経とうとする頃だつた。異臭がするのだ。食べ物腐つたような臭いがどこからか漂ってきていて、それがもう何日も続いている。けれど、周りに住む人々がそれを問題だと思つてもいないようだつた。私と同じように顔をしかめるのに、臭いに対して文句をいうこともせず鼻をつまむ。お隣さんも、友達もみな一様にそうだつた。おかしくはないかと訊ねても、「いつものことだから、そう気にすることはないよ」「もう少し辛抱すればいいだけのことよ」と言われるだけだつた。

臭いは日増しに強くなつていった。主人が帰つてきた時に、露骨に嫌な顔をするようになった。そのうち窓を開けるのも、換気扇を回すことも嫌になつた。外に出るのにも覚悟が必要だつたが、家の

中にいるよりもどこか遠くへ出て行つてしまつたほうが楽なもので、家を開けてばかりになつた。

やはり、この街はどこかおかしいのではないか。一度持つてしまつた疑いはむくむくと私の中で大きくなつていった。この臭いのもとを突き止めるべきではないのか。あるいは、手の施しようがないなら、もう一度引越すことも考えないといけないかもしれない。そんな気持ちだつた。

私に決意をさせたのは、友人を家に招いた時だ。「今はちよつと……」とやんわり拒否したものの、昔なじみというのは恐ろしいもので、無理に予定を入れられてしまつた。その友人が言ったのだ。「家にはとことんこだわつて、こんなにいいお家を立てたあなたが私を呼ばないものだからおかしいと思つたのよ。なに？ この臭い」「わからないわ。最近、ずっとこういうなのよ。みんなは放つておけつて言うばかりで」

「絶対おかしいわよ、そんなの」  
絶対よ、と友人は繰り返した。私の住む街を、おかしいなどと言われてだまつてはいられなかつた。

その次の日、私は臭いの発生源を探して街の中を歩いた。私の街を汚すものをなんとしても見つけてやるといふ志だつた。

ところが、意気込んで見たはいいものの、ちよつとも歩かないうちに、臭いはなくなつてしまつた。考えてみれば、臭いというものにはよほどのこともない限り遠くまでは運ばれない。臭いの発生源はうちの周りに違いなかつた。

絞り込んで探せば早いもので、衝撃的なことに、裏の屋敷が臭いの発生源らしかつた。私は怒りに身を任せてその家の門を叩いた。

しかし、その屋敷からはものすごい臭いが流れてくるだけで、あとはうんとすんとも言わなかつた。そういえば、ここに誰かが出入りしているところを見たことがない。どういふことだろう。

「あの家はね、ゴミ屋敷なんですよ。知らなかったんですか」  
隣に住む老婦人はそう言った。

「ゴミ屋敷ですって？ こんなところに？」

信じられない。私の美しい街にゴミ屋敷とは。なんでこの人たちはそんなことが許せるのだろう。

「それじゃあすぐにでもその人に言っ、ゴミを捨てさせませんと」

「そんなことをする必要はないのよ。明日まで待つてみなさいな」  
老婦人はそう言った。

果たして翌日、私はがさがさともを動かすような音で目を覚ました。まだ早朝だというのに、隣の屋敷からは何かが動き回っている音が聞こえていた。

驚いて外に出ると、老婦人が既にいて、私の家の裏のゴミ屋敷を眺めていた。

「ほうら、ご覧なさい」

言われて見ると、何人もの人が、ゴミ屋敷に出たり入ったりしている。それは私と同じような主婦であつたり、あるいは中年だつたり、老人だつたりした。

「あれは？」

「この街自慢の、美化部隊ですよ」

美化部隊。そうか、あれが。初めて見た。

「美化部隊はね、こうしてゴミの溜まった家を綺麗にする役割も持っているの」

「じゃあ、あの屋敷の人は……」

「それをしっかりわかってるんですよ」

何と言うやつだろう。私はふつつつと煮えたぎるような怒りを自分の中に感じた。

「文句を言ってやらないと」

と肩を怒らせて歩き出した私を、老婦人が

「やめてくださいいな」

と止めた。

「なぜです？ こんなにもひとさまに迷惑をかけて、しかも人がやってくれるから自分は綺麗にしなくても良いなんて、そんなことは許せません」

こんな美しい街にいるなら、なおさらのことだ。

「でもね、この街がこんなに綺麗なのは、あのお屋敷のおかげなんですよ」

それはどういう意味だろうか。

「あの美化部隊のひとたちは、街を綺麗にすることでお金をもらっているでしょう？」

老婦人が言う。そのとおりだ。彼らのおかげで、この街はごみくずひとつない、綺麗な街でいられるのだ。ただあの屋敷を除いては。

「じゃあ、彼らの仕事がなくなつてしまつたら、どうなるかしら」

「それはもちろん……、街を綺麗にする仕事がなくなつて、この街の美しさが損なわれてしまう……」

「そうでしょ。だから、あのお屋敷は美化部隊にとつてもありがたいものなのよ。仕事をしているおかげで、今もずっとあり続けていられるんだもの」

「そんな……」

じゃあ、あのゴミ屋敷は必要悪だということか。

「住むところを間違えてしまつたようだけど、悪臭は長く続いても十日と少し。それ以外は快適な街だもの。いいところよ、ここは」

老婦人と会話している間にも、美化部隊の人々はテキパキと仕事をこなしていて、あの腐つたような嫌な臭いもほとんどなくなつていた。

次の日は、久々に快適な朝を迎えた。美化部隊は消臭までやってくれていたらしく、昨日までの異臭が、まるで嘘のようだった。さ

らに思わぬことには、美化部隊は我が家まで磨いていってくれたので、壁や屋根はびかびかだった。こんな日に布団を干すなんて、これほど気持ちいいことはない。

ああ、やっぱりここに引越してきてよかった。私は改めてそう思った。しばらく一度、勝手に家が綺麗になる上に、家の裏には、いくらでも捨てられるゴミ箱があるのだから。

終

## 雨を被った双子

みのすけ

雨が勢いを増し、僕がすっかり挿んでいる傘を、その大きな音で揺らした。六月の始め、梅雨の真つただ中だ。強く降る雨の匂いは、その勢いとは違って心に落ち着きを与えてくれる。

学校からの帰り道、周りには人つ子一人いない。この大雨ともなれば、大抵の学生は歩きではない手段で家路についている。僕のように歩く学生が稀だろう。

「ああ、歩きたくない……」

そう一人愚痴ると、周りの空気が重くなつた気がした。どんよりとしたネガティブな目で、辺りをちらちらと見回す。

今まではほとんど目を向けたことがない、地元との強い繋がりを持つであろう個人商店の群れが、あちこちから僕を眺めていて、ふと、檻に放り込まれた動物になつたような気分になつた。

目を向けたこともない、ということは、同時に訪ねたこともない、ということだ。基本的にお金を使うのは、シヨツピングモールか通販だけだ。

なおかつ、最近借金欠。現時点で財布は空っぽ。基本歩きである僕は、遠出するための移動手段として原付を買つたのだ。講習はぼつちり受けたし、乗ることもできる。だが、残念なことに、僕の通う学校はバイク通学禁止なのである。

ふと我に返って、目の前に口を開けた商店街と対峙する。

「行ってみようかな」

口を衝いて出たのは、そんな言葉だった。

別に、今まで気にしていなかったから、とか、観察されて怖くなつたから、とかそんなありそうもない理由ではなく、なんとなく、ただなんとなく、この商店街に興味湧いてきたのだ。どうせ雨で帰る時間は遅くなるのだし、その直感に従ってみるのも悪くない。

「三時のおやつでも食べるか」

腕につけた時計を眺めると、針は三時を指していた。

「かふえ、りばーべる……?」

その喫茶店を見つけたのは、入り組んだ商店街の路地に入り込んですぐだった。

一応大通りからも目に付く位置にあり、看板も見えるようになっていた。その木製の看板には「Cafe River Ball」と白の字で書き込まれていた。つまり川と鈴。今のところ意味は分からなかったが、一応店の名前だろう。

「……よし、入るか」

特にためらいもなく、営業中、の板が掛けられたドアを押す。吊るされたベルが小気味いい音を立てた。何故だかとても引き寄せられる、不思議な音だ。

「いらつしやいませ!」

ベルが鳴つたことに気付いたのでだろう、店内の奥、カウンターの向こう側から、女の子がそんな風に会釈した。店員だろうか、水色のシャツに、茶色のエプロンをしている。可愛く丸まった目尻は、彼女の柔和な笑みを引き立てていた。短めの髪が肩にかかり、照明で光っている。

「久しぶりのお客ね。大歓迎」

と、左手からも声が出た。反射的にそちらを向くと、そこには木製のテーブルがあり、一人の少女が不機嫌そうなかめつ面を作っていた。ショートカットのつもりもないのかもしれないが、その髪は短く揃えられ、少々跳ね気味だ。

「双子……」

その二人は全くそっくりで、表情から読める機嫌とその目、そして髪型や服装からしか区別はつかなかった。何やら超然とした雰囲気身をまとっている双子だ。

「えへへ、双子なんですよ。とりあえず、お席どうぞ!」

と、カウンターの彼女が、店内がガラガラであるにもかかわらず、



もう一人の座るテーブルを手で示した。といって、従わない理由もないので、テーブルの彼女の向かい側に座る。

不機嫌そうな表情は一切崩さず、テーブル越しに僕をも珍しそうに見てきた。

「ご注文をどうぞ？ お客様。おすすめはかき氷」

妙に人を使ったような口調で、僕に一枚、メニューを差し出してきた。この子は店員なのだろうか？

「君は店員なの？」

特に聞くことで困る質問ではない。投げかけてみる。

「いいえ、違うわ。ただの居候というか、この家に住んでいるだけに働くのはそこにいるみぞれだけ」

と、彼女の指さす先を見れば、双子の片割れ——みぞれというらしい——はカウンターで欠伸をしていた。客が少ないから、暇なのだろう。とは言え、この店は一人でも成り立つのだろうか。もしかして、他にも店員がいるのか、それとも目の前の彼女も働くのか。「一体君らは何者なのさ？ あつちが双子の……姉なのか妹なのか分からないけど」

僕は少し胡乱気に、メニューを眺めながら、横目に聞いてみた。

「……えっと、私は鈴川あられ」

「それで私が、鈴川みぞれです！」

斜め前から割り込んで、元気な声が飛んでくる。

なるほど。

元気な敬語、滑らかなショートカットがみぞれで、生意気そうな口調、跳ねたショートカットがあられ。読み込めてきた。

リバーベル、という名前も、鈴川から取ったのだろう。鈴はベルだし川はリバーだ。

「別に、姉妹の定義はありませんよ。二人とも姉で、二人とも妹です！ あられちゃんができることは私ができませんし、私ができることをあられちゃんできませんから」

「私は流石に序列が欲しいけどね……結果が違うじゃない、結果が」

みぞれが屈託のない笑顔でそんなことを言うと、あられが不機嫌そうに返す。双子にしては性格が違う。お互いにお互いを支えそうで、バランスはいいのかもしれないけど。

「……それじゃあ、かき氷の宇治金時で」

先ほど渡されたメニューでは、異常にかき氷が推されていたし、店員もとい居候もおすすめしていた。

「かしこまりました！」

僕が頼むと、エプロンを翻して、笑顔でカウンターの裏に消えていった。これはいいかもしれない。何がと言うわけではない。

クラシカルな空気が漂う店で、何かと居心地が良い。天井には、空気をかき回す大きな扇風機、カウンターには、木彫りの古めかしいラジオ。よく動くな、と感心したそれからは、有名おもちや会社、散英堂の社長のインタビューが流れていた。名前は忘れたが、社長の通る声が聞こえる。社名は子供の名前から付けたこと、とても可愛かったことなど、微笑ましい家族の話が続いていた。

いや、そういう話ではなかった。とにかくこの店がいい店だと思ったのである。

「良い店だね」

お世辞、というわけではないが僕は褒める。

「そりゃあ、私の店だから」

あられが胸を張る。胸を張るな。ないのに。

「いや、君の店じゃないだろ」

「そう思う？ ふふ、もしかしたら私がこの店を根本的に支えている可能性が、あるのかもしれないわ」

すうっと、底の見えない目が、挑戦的に笑みを浮かべる。冷たい雰囲気、まるで完成されたかのような、まっさらな色。なんだか、嫌だった。

「……………」

もしかして、まさか本当に何かあるのか？

「冗談よ、冗談」

彼女は吹き出し、指をばちつと鳴らした。途端に、目は意地の悪い元のものに戻っていた。そこにあるのは、片割れとは違う、皮肉気な姿だけ。

「私は基本的にこの店では働かないつもりなの。別に働けないわけじゃなくて、働かないの」

「なんで……？」

反射的に質問する。そうすることが自然であるように、僕の口は動いた。空気が刺さるような、ちくちくとした痛み感覚がある。「私は望めば何でもできる。誰もが思いつく、したいことは何だってできるの。それこそ、望もうと望まないと、その事実は何曲げられないけど」

「……君、お姉さんなのに、手伝いもしないのか」

「それじゃ、私はちよつと、やりたいことをしてくるわ」

いたずらっ子のような笑みを浮かべて、あらはテーブルから去って行った。無視される経験は多い。黙って見送り、頬杖をつく。

雨がばらばらと降り注いだ。僕には小気味のいい音楽だ。

「お待たせしました！」

みぞれがかき氷を携えて、僕の座るテーブルにやってきた。かき氷を僕の前に置き、にこりと笑うと、先ほどまであらはが座っていた席に座った。

濃緑色の抹茶が注がれたかき氷は、とてもおいしそうだった。百聞は一見にしかず、と言うが、この場合、百見は一食にしかずか。

「いただきます」

「えへへ、どうぞ、です」

対面から、意味のない許可が飛んできた。習慣か、何かなのか。僕は、それならば、とスプーンを取り、一掬い、氷の山を崩しとる。「……美味い！」

ふわふわともさくさくともつかない、けれど滑らかな口どけの食感が口に広がり、宇治抹茶の味わい深い苦みと、小豆のほのかな甘

みが身体にしみこむ。何とも不思議で、幸福な気分になる。こんなもの、今までの人生で食べたことがない。

「幸せです、自分の作ったものをそんな絶賛してもらえるなんて」

みぞれは心から嬉しそうに、あらはとはまるで違う笑顔を見せた。

「かき氷って、英語でchipped ice（チップドアイス）ですよ。夏らしい

食べ物です。欠けた氷、とか、削られた氷って意味らしいですけど、かき氷の、かき、って欠き、なのかもしれませぬ」

みぞれがふと、思い出したようにそう言った。僕はかき氷を食べつつ聞くことになるので、少し上目遣いだ。

「でも、それって若干意味が違うような……」

削られた氷、の方なら意味は通るけど。

「まあ、そうなんですけどね。砕かれた氷、でもいいですし。かき氷の食感、氷の切断面と大きさと決まるんですよ。当然、ではありますけど、かき氷を作るとき、丁寧に、けれど大胆に削っているんです。破片が大きすぎぎぎにならないように、かつ、細かくなりすぎないように」

「かき氷って、一概に機械と素材だけで決まるわけじゃないんだ」

「そうですね。それらも重要なものではありませんけど、工夫、と言いますか、テクニクですね。そうしてかき氷を作っている時、私は感じるんですよ。砕いて破片を取り出すのでもなく、削って小さくするのもなく、消えていく、という感覚なんです」

「消えていく……」

溶けていく、に近いのだろうか。まるで積もった雪のように。

「消えていく、という言葉のニュアンスに一番近いものって、何でしょうね？　そして私が思う言葉は、欠けていく、なんですよ」

水が欠けていく、その言葉だけなら、砕ける光景が目には浮かぶが、さっきの話を聞いた後だと、少しずつ消えていく情景が浮かぶ。

かき氷は残り少し。名残惜しさに襲われ、今や少しずつ食べている。この味は不思議なもので、飽きなかった。

しゃくしゃく、しゃくしゃくと削る音。雨音も聞こえず、隔離された空間のように、ただ閉ざされている。決して変わらない空間、そんな不変のもの。確かな安らぎがここにはあった。

「は、ありがとう。美味しかった」

ついに、食べ終えてしまった。僕は心から礼を言う。

「珍しいですよ、礼を言う方は。本当に」

柔らかな微笑みで、ありがとうございます、と彼女は言った。

「あら、仲がよろしいようで」

いつのまにか、テーブルにあられがやってきていた。したいこと、とやらは終わったのだろうか。

「そう言えば、聞きたいことがあるんだけど……」

僕はそう、口を開く。

「散英堂の社長令嬢がここで、なんで喫茶店してるの？」

ちよつと考えれば誰にでも分かる。

簡単なヒントと言えば、ラジオの放送だろう。散英堂、という社名は子供の名前からとった、そしてこの二人の名前は漢字にするなら霰と霰。二つからあめかんむりを取れば、散と英になる。あられの方が姉だと思ったのは、散の字が社名の一字目だからだ。序列として、上の方が先に立つのは、よくあることだろう。

次に、この店が営業していること。少なくとも、営業しているということは、それだけの資産があるということだ。そしてそれだけの資産を一般的な子供が手に入れるためには、賭け事ぐらいしか手段がない。つまり、彼女らは一般的な子供ではない、ということだ。さて、質問の方はというと、二人の反応は決して驚いたものではなく、予期していた質問のようだった。

「……私はみぞれに着いてきただけよ。インターネットさえあれば、どこでもどんなことでも、大体できるから、困らないし」

散英堂のお手伝いだって、インターネットでできるのよ、と加えて言った。先ほどまで席を外していたのは、お手伝いか？

「どつちかと言えば、私があられに頼りすぎなんですけどね。お仕事をしているのは、主にあられですからね」

少し暗い笑みを浮かべて、みぞれは続けた。

「私が喫茶店を営業したいって言いだしたんですよ、かき氷の美味しい店を出したいって、言っただけです。金持ち道楽ですね」

悲しげに目を伏せ、ぼつぼつ、と吐き出した。

「……あのさ、アドバイスなんだけど」

僕はかき氷を頼んでからずっと思っていたことを言う。

「かき氷以外もメニューに加えたらいと思うよ……」

メニューを見たとき、そこには何行か文字が並んでいたものの、存在するメニューはかき氷一つだけだった。かと言って、他の物を注文するつもりはなかったもので、あえて指摘はしなかったけど。ちらりとあられをにらむと、目をそらしてうそぶいた。

「いや、私はただ資金を提供しただけで、経営以外には関与してないわ。ほら、営業方針はみぞれのものだし……ね？」

ね？ いやないと思う。

「とにかく……喫茶店なんだから他のものも作りなよ」

「あ、ありがとうございます！」

みぞれが元気に返事を返した。笑顔がまぶしく、少し後ずさる。

「じゃあ、僕はこれで」

ひと段落着いたため、手を振って、店を出ようとした。

「ちよつと、お代忘れてるわよ」

「あつ、代金もらってないですね。五百円になります」

二人が思い出したように、声を合わせて言う。やっぱり仲のいい双子だ。相補的な関係かつ、同一性もあるじゃないか。

「言われてみれば……」

財布を取り出しながら、またこの店に来るのだろうか、と思った。窓の外は早くも晴れ渡り、雨雲は影もなくどこかへ消えていく。

みぞれからもあられからも遠い空が、大きく広がっていた。

## 夏に死ぬもの

箱庭氏

全く、夏と云うのは様々なものが死ぬ。

花火は直ぐ逝く。私を友人だと云う少年は、此の時期、友人を招くと、陽の落ちた庭先で態々買ってきた花火の束（細身の派手な奴だったと記憶している）と、少々禿びた蠟燭を引張って来て、何か娛しいのかきやいきやいい言いやら遣る。花火の先が蠟燭の揺れる火で点くと、赤や青や各々勝手な原色が、四方に散っては私の目を傷つけ、其れを残して、其れ丈を遺して、逝く。然し、当分其の色がちらちら斑の中へ浮かぶので、厄介だ。異に線香花火と謂う奴は早い。その上面倒だ。火が点くと、周囲から酸素を吸ってゆうくりと膨らむ蕾が、其の内、滴を飛ばす、其れから松葉を思わす驟雨と為って目の奥で弾ける、気が付いたら涙雨で、逝く。ところが此奴は中途で逝く。下手なのは始めのは字で殺す、最期まで為るのは中々見ない。少年はどうも下手糞だった。

それから、蚊取線香も逝く。点いている内は意識もされぬのに不図したら逝って、ぶんぶんとして来る、痒いと触るともう腫れている。夕涼みの、少年の父はちえつと「かあさア、線香が切れたア」か「寸燐は有るかい」、零す。どうも此奴は生来不憚な奴らしい、使われてちえつなら未だ好いが、缶の底に余った奴は押し入れに詰められて仕舞って、時間超越器（そんな浪漫趣味なものでは無いが）が如く、次の夏に引き摺り出されたかと思いきや、「もう駄目かしら」「不可ないね、湿気ている」「然うねエ。……普通塵で好いかしら」「それで好いだろ」、裁きの結果屑籠行きの流罪を喰らう。不運を呪う他在るまい。

祭も逝く。少年と妹は能く二人で、父母を駆り出して祭へ往くが、あれは余り持たない。私と少年の出逢ったのは確かに其処であった

ので、私もその景色は覚えているが、あれは、煌々した紅い灯が魅せる夢に過ぎぬ。唯、眠って見る夢より大分質が悪くて、一番の問題は、確かに現実で在るのだ。徑に沿う夜店は甘い蜜（艶やかに冷たい光の飴細工やら、凝として積もりの面やら、じゅうと喰る天麩羅やら、得体の知れぬ古いやら、ちやちな玩具やら、護謨風船、石鹼、万年筆……）で、其処に群がる蟻を、私は気が知れないと傍から眺めていた。其の私を少年が見掛けて父母に向かって強請ると、いとも簡単に捕まえて、然うして私は彼の家に転がり込むことに為った。

そして、人も逝く。広島だか長崎だか、如何大変だったが知らぬが大変だったと伝え聞いた。少年の生まれたのと同じ頃だったらしい。今では随分と落ち着いて、時折妙な死人が出るというが、私には遠い話だ。然う云えば、人は二度死ぬ、誰かが云ったように記憶している。少年は一度逝く、その亡骸を大人と呼ぶ、だから、大凡は二度死ぬのだと聞いた。だからあの少年も逝く。唯、矢張り私には縁遠い話だ。

嗚呼、然うだ、私の友人も此の前、一年程前に、逝った。連れ立って此処へ来た奴だが、割合と直ぐ逝った。少年は奴を惜しんで庭の隅へ埋めた。秋の初め迄は小さな茶碗に水を入れ適当な草花を屹度遣っていたが、冬の兆しが覗く頃には回数も減り、其の内茶碗は泥に塗れた。

然うで在るから、私も屹度逝く。此の夏中に逝くだろうか、半ば過ぎて在るが未だ秋は、時折、朝晩顔を出す程度だ、じりじり夏の端から喰われて行く間に私は焼き切れるだろう。少年も然う長くは悲しむまい、私の友人が如く、其の内に、半年経ずに忘れる。唯、復、茶碗が泥に塗れるのは頂けないから、彼奴と同じ場所へ埋めるだけで気にするなど少年に言いたい、どうも其の術を持たないの彼の自由にする他無い。それで少年は私を忘れた再びの夏、騒がしい絢爛の並ぶ夜徑で父母に「此れが好い」「どれだ」「赤が好い……否、黒かなア」「其の、蝶尾何か好いんじゃない」「うーん

……」「好きなのを持つてくと好い」「ほら、早く決めないか」  
「うん、矢つ張り赤にするよ」「毎度オ」「好かつたわね」「うん」  
「お兄ちゃん、見して」「ほら、好いだろう」「綺麗ね」等ときや  
いきやい、懲りずに新しきを手に入れる。否、黒かも知れない。

今日は研究をするのだ、と、自慢げに、鏡レンズの取れた父の眼鏡を不  
似合に掛けた少年が、ぼたぼた廊下を駆ける。「お兄ちゃん狡ずるい」  
追い駆ける妹に「分かつたよ」、眼鏡を渡すと燥はしゃいだ彼女に押され  
蹠よち躑ちめいた少年が、鉢はちに当たる。周囲の水が揺らいで、私の体が傾か  
いだ。くらりと為るが、直ぐ落ち着いて、硝子がらす越しに少年の少々心  
配した顔が映った。私は、私を覗き込む少年の黒い瞳に、私の赤い  
尾を見た。

## 天体観測

小刀

八月十五日。太陰暦では十五夜や中秋の名月などと呼ばれるこの日だが、現在使われているのはあいにく太陽暦。終戦記念日という印象が私の頭にふと浮かぶのみ。そんな日の夜、私は友人とともに近くの山を登っていた。

「おい、体力は大丈夫か」

「大丈夫ー。心配ありがとね」

前を歩く友人が声を掛けてくる。男と一緒に登山なんて、クラスメイトにでも見られようものなら話題の種になるのは間違いないだろう。実際はそんな関係でなくとも。しかしあいにく、今夜出かけたということはほとんどの人間が知りえない事実であり、よって周りを気にすることなく穏やかな気持ちで二人きりになれるというわけだ。

「もう五分もあれば着くから、もうちょっとだけ我慢してくれ」

「あはは、こう見えて体力には自信あるし大丈夫だつてー」

「そうか」

生真面目に声を掛けてくれる友人に、軽い返事をする。実際運動部所属の私の方が、文化部員な友人よりも体力はある。それを知っている私も声を掛けてくれるのは、果たして友人が男で、私が女だからなのだろうか。枝を踏み折る感覚を足に感じながら、そんなことを考える。

そのまま歩くこと五分。先の宣言通り、木々に覆われていた山道から一転、開けた平原に辿り着いた。登山中はごつごつした石や枯れ枝が目立っていたが、ここは草が芝生のようになっている。暗くてよく見えないが、ぼつぼつと花も辺りに咲いているようだ。今が夜なのは勿体ないと一瞬思ったが、すぐに友人が私をここに連れて来た理由を思い出す。

「……曇ってるな、やっぱり」

「そうだねー」

二人で空を見上げる。今日の天気は晴れだと聞いていたのだが、見上げた空はあいにく曇り。星を散りばめたような天の川も、織姫伝説の伝わる三角形も、欠けることのない満月も見えない。横で友人が溜め息を吐いたのが耳に届いた。

「すまん、せっかく連れてきたのにこんな天気で」

「天気なんてどうしようもないんだし仕方ないよー。謝ることないつて」

そう、そもそも切っ掛けは星好きな友人が私を天体観測に誘ってくれたことにある。勉強疲れしているだろうから、気分転換にでもどうかと誘われたのが今朝九時のこと。その後も少し勉強をやつてから、午後七時に家を出て二人で山を登り、今に至るわけだ。

運動部員といえど登山は慣れておらず、べたりと地面に座り込む。指先に伝わる草の触感が心地よく、そのまま体を投げ出すように横になった。空を見上げるような体勢になる。もつとも、視界に映るのは曇り空だけ。数分もすると飽きてしまったので視界を動かすと、先ほどからずっと立ち続けている友人の姿があつた。一緒に来たのだから姿があるのは当たり前なのだが、ここまでずっと空を見上げて続けているのには少し驚いた。足や首は痛くないのだろうか。そう考えると、体力に自信があると言っていた自分が少し恥ずかしくなる。やはり男と女では違うのだろうか。そんなとりとめのないことを考えるが、それに答える人間は当然いない。

そのままぼうっと、一人は立ち一人は横になったまま時間だけが過ぎていく。家にいたときは冷房をつけていないと暑くて辛抱ならなかったが、ここは自然が多いからか、涼しい風が体を撫でていくのがたまらない。サアツ、サアツと風が草を鳴らす音が、さながら子守唄のように私の眠気を誘う。せつかく山まで来たのに勿体ないと思つたが、脛が下がるのは抑えられない。そのままどんどん、視界が暗くなっていき――

「——おい、起きろー」

「……ふえ？」

目を覚ますと、友人の顔が間近に迫っていた。ここで飛び起きてもすれば頭突きを食らわせてしまうことになるだろう。しかし私はあまり寝起きがよくないため、訪れたのは衝撃ではなく僅かな頭痛だけ。このまま横になっているのも少し辛いので、よっこらせと体を起こす。

「あいたた、そんなに長いこと寝てた？」

「ああ、ぐつすりだったな」

「起こしてくれても良かったんじゃないのー？」

「あんな気持ちよさそうな寝顔見せられて、起こせという方が無理だ。勉強のしすぎで疲れが溜まっていたようだな」

「……そうだねー」

私達二人は今高校三年生、つまりこの冬には入試を控えている。だから私は寝る間も惜しんで勉強に励んでいた訳だ。

「だが先生にも言われただろう、お前は十分学力があるんだから体調管理をしっかりすれば問題ない。風邪でも引いたら台無しだぞ」

「そうなんだけどね……なんか不安にならない？ 勉強してないとき」

「気持ちはわかるが」

私も友人も、学校ではそこそこ上くらいの順位をとっている、俗に言う優等生。他の人ほど必死に勉強する必要はまだないのだが、私は心配性だからついやり過ぎてしまう。多分そんな私を思っ

て、今日は誘ってくれたんだけど。

「ただ、退屈させたなら申し訳なかったな」

「いやいや、だから気にしないで。ここの芝生気持ちいいよ？」

「……そうか」

そんな会話を交わしながら、再び空を見上げてみる。雲は眠る前よりは薄くなったようだが、それでも星や月を見ることは敵わない。

「そろそろ夜も更けただろうし、帰るか」

「そうだね」

よっこらせと体を起こして立ち上がり、友人と肩を並べる。……もしかしてずっと立っていたのか？ と、その刹那。

ゴウツと強い風が私の体を打ち、足を取られて倒れそうになる。

あ、これ頭打つんじゃない。そう思った次の瞬間。

「大丈夫か」

ぼふつと音を立てて、友人が私の肩を支えてくれる。倒れずに済んでよかったと一瞬思ったが、よくよく考えてみれば私の肩に友人の手が乗っているわけで。何故か顔が熱くなる。そんな気恥ずかしさを誤魔化そうと上を見上げて、私は目を見開いた。

「あ……」

その声につられたのか、友人も空を見上げる。そこにあつたのは、言葉では表現しきれない見事な夏の夜空だった。星空は冬が綺麗だとよく言われるが、それに負けず劣らずの空。今日の月齢も星々の名前も、二人で抱き合っているような体勢だったのも忘れ、その光景に見惚れつづけたのだった。

「最後に良い物を見せられてよかったよ」

「そうだねー」

帰り道、歩いてきた道を下って行く。私の片手を彼が握っているのは、寝ぼけて転んでしまうことが無いようにという彼なりの配慮なのだろうか。やっぱりなぜか、私の手は少し熱くなっていた。

「気分転換にはなってくれたか？」

「うん、ぼつちり。ありがとー」

ぼつりぼつりと途切れ途切れな私たちの会話。けどその会話の距離が数時間前よりも短く感じたのは、きつと気のせいじゃない、と思う。心なしか、行きよりも早く山下りは終わった気がした。

「お疲れ様、無理だけはするなよ」

「大丈夫だってー」

そう挨拶を交わして、私たちはそれぞれ帰途に就いた。  
多分これから半年くらい、心休まる時が来るのかどうかつてくら  
い苦労することが続くと思う。それでも、今日の彼との出来事を思  
えば、そんなの苦労は乗り越えられそうな気がする。  
そんな予感を胸に抱きながら、私は家へと歩いて行つた。

了



## 雨上がりの送り傘

ツリウム

雨の音が聞こえる。豪雨という訳ではないが、さりとて小雨というわけでもない中途半端な雨だ。このところ、今のような天気が続いている。今日でもう六日目だ。わざわざこの町に降らずとも水が欲しい地域はごまんとあるだろうに。雨は天からの恵みなのだから大切にしない、というのは幼い頃の僕に向けた母の言葉だが、それにも限度がある。

溜息をついて外に目を向ける。窓に映るのは陰鬱な町並み。遠く山々は雨によって灰に塗り潰され、今はその姿を隠している。今日は日曜日なのに、いつもと違って人通りは少ない。

雨が嫌いという訳では無いのだ。むしろ、雨の降る景色というのはどこか非日常な感じがして、一変した町の雰囲気を楽しむくらいの余裕はある。しかし、非日常が日常になってしまえば、雨というのは天から落ちてくる憂鬱な水だ。そんな認識だと、どうしても気分が落ち込んでしまう。

「まあ、天気になんか言っても仕方ないか」

とりあえず、課題でも終わらせることにしよう。そう思い立ち、窓から視線を外して机に向かう。週末の課題は量が多く、半時間やそこらで終わるものではない。朝の内に終わらせて、昼からはゲームでもしようか。プリントの束に辟易としながらも、僕は課題に取り組み始めた。

▼ 「ご飯出来たわよ」

僕を呼ぶ母の声に気付き、顔を上げる。いつのまにか集中していたらしい。机の上にある時計を見ると昼食には少し遅いくらいの時間を指し示していた。

そこでふと気がついた。ここ最近ずっと降り続いていた雨の音が

聞こえない。いつもなら、課題の最中だとしてもそれ程の変化があれば察知していたらうに、今日に限ってそれが無い。よほど集中していたのだろう。机の上に残った課題がいつもより少なく感じるのは気の所為では無いだろう。

逸る気持ちを抑えながらも窓の方を見ると、やはり雨は止んでおり、道路に出来た水溜まりが青い空を映し出している。

ただ雨が止んだというだけなのに、心が浮かび上がったような気分だ。昼食を食べ終えたら散歩にでも出かけるかな。久々に見る晴れ間だ。家の中で過ごすのは少し勿体無い気がする。

▼ 昼食を食べてすぐに家を出て、特に行き先も決めずに散歩を始めた。傘を持つていこうかと扉の手前で少し悩んだが、結局は手ぶらで行くことにした。せつかく長い雨が止んだのだ、雨の象徴ともいえる傘を態々持ち歩くというのも野暮というものだろう。幸い、現在の空に雲は少ない。東には雲の端が見えるも、長い間灰色だった為か、西南北、それに頭上の空は単なる晴れよりも蒼く見える。

悪くない気分だ。いつもの散歩ならば近所を歩き回るだけで家に帰るが、今日は少し遠くまで足を向けてみようか。

そう思っただけは穏やかな気分のまま歩き続けた。行き先などは決めていなかったが、なんとなく、雲の向かう方向へ。

近所の公園、住宅街、河川敷。様々な場所を横目に見ながら通り過ぎた。しかし、小規模な竹林を横切る道の途中で、周りが暗くなり始めていることに気が付く。まさかと思っただけ顔を上に向けると、案の定、灰色をした雲が空を覆っている。

それに気が付くのとほぼ同時に、天から降ってきた雫が僕の頬を濡らし始めた。西の方角に目を向ければ、雲の灰色が段々と濃くなっているのが見てとれる。

まずい、このままでは濡れ鼠になってしまう。走って帰るにしても、この場所は家から遠すぎるだろう。帰宅する前に風邪をひいてしまいうさだ。仕方ないので雨宿りできる場所を探すことにし、近

くに雨を凌げるような場所はないかと首を回すと、道から少し外れた竹林の中に古ぼけた小さな小屋が建っていた。

ちようにいい、この小屋の軒を使わせてもらおう。小屋に駆け寄り、その壁に背を預けると、その見かけとは裏腹などっしりとした安定感に少し驚く。外見は寂れた木造のポロ屋だが、造りはしっかりとっているようだ。

よく見ると、外壁こそ汚れているものの、板が腐っているだとか、どこかが壊れているということはない。案外、最近建てられた小屋なのかもしれない。

いや、この小屋のことはいい。それよりも、これからどうするかを考えないと。

にわか雨なら良かったのだが、降り続く雨は先程よりも強くなっているように見える。雨が止むのは期待しない方が良さそう。

いつそのこと、小屋の中に入って雨具を探してみようかとも考える。これから先、この小屋を再度訪れることは無いだろうから、ばれる心配は少ない……。

いや、良くないか。この小屋は見かけによらず丈夫な造りをしているし、破損もない。つまり、今も誰かに管理されているということだ。警報くらい備えてあるかもしれないし、とすれば監視カメラでも設置してあるかもしれない。

そんなことを考えつつも、とりあえず小屋の周りをぐるりと一周すると、思わぬ発見があった。道路からは見えない側の壁に取り付けられていた小屋の扉。その脇に一本の傘が立て掛けられていたのだ。傘布は無地の黒で、柄はプラスチックで出来た単一の茶色。地味な傘だが、汚れや風化は見られず、いつでも使えるような状態だ。

目にしたそれを前にして、僕は考え込む。先程は小屋の中に入るなどと考えてはいたものの、実際にその好機があれば怖じ気づいてしまう。長い間放置されていたようならば葛藤は少なかつただろうが、かなりきれいな傘だ。新品には見えないが、かといつてくたびれた様子ではない。きっと今でも誰かに使われているのだろう。

少し眉間に皺を寄せ、傘と空を交互に見比べる。顔を伏せて短い逡巡をした後、傘に目を向けた僕の答えはもう決まっていた。

▼ 雨の中を歩く。右手には何も無いが、左手は傘を握っている。結局、僕はあの傘を持って来てしまった。良心の呵責が無いわけではないが、後悔はあまりしていない。小屋の中に入れておけば良かったのに、態々外に晒していたのだ。持って行けと言っているようなものだろう。盗む方も悪いが、無防備に置いている方にも責はある。そう考えて、僅かに滲み出てくる罪悪感を拭い去る。

元来た道に戻って自宅へと向かっていた僕だったが、益体のない思考が途切れた為か、不意に現実的な問題が頭に浮かび上がった。

この傘はどうしよう。

このまま家に持って帰れば、この傘はどうしたと母に聞かれるはずだし、後日あの小屋に戻すにしても、小屋の持ち主と遭遇してしまうかもしれない。先の事を全く考えていなかった自分の思考に溜息が出る。

仕方ない、短い距離ならばあまり冷えないだろうし、この傘は家の近くにある公園にでも捨てて、そこからは走って帰ろう。あまり気は進まないが、この際仕方がない。次散歩に行くときは折り畳み傘ぐらい持ち歩こうと決めて、僕は地面を見つめながら家に向かって歩き続けた。

▼ 傘を公園の茂みに捨てて家に帰った後は、風呂に入り、夕飯を食べ、そのまま寝るといって、就寝時刻が少し早いこと以外は普段と変わらない午後を過ごした。その間降り続いていた雨も、六日を共に過ごしたことで、半ば日常に溶け込んでいた。

そして次の朝、いつもと変わらない時間に起きて、机の上で鳴り響いている目覚まし時計を止める。起き抜けで乾いている目を窓に向けると、昨日の昼と同じように雨は降っていないかった。

今日も特に予定など無いが……。そうだ、散歩をしよう。昨日のような浮かれた気分では無いのだが、昨日は雨の所為で消化不良に終わったので、仕切り直しという意味合いも込めてもう一度行くのも悪くない。

着替えて、朝食を食べた後すぐに行こう。昼まで待つては、また雨に降られるかもしれない。

▼ 散歩に出た僕は、所々にある水溜りを避けつつ昨日と同じ道を歩いていく。しかし、今日の空は生憎と曇り模様だった。今すぐ雨が降るような厚い雲ではないものの、そこにすき間は無く、空を見ることは叶わない。もちろん、昨日に学んで折り畳み傘は持つて来ているが、晴れた空を見るのもう少し先になりそうだ。

そうして、若干の不満を抱えつつも竹林を横切る道を越え、昨日は行けなかった竹林の先へと足を踏み出す。このあたりは左右に田園が見える広い道路で、脇には歩道もあり歩きやすい。

と、そんなことを思つて周りへの注意を怠つていたのが悪かったのだ。

最初に聞こえたのは甲高いブレーキ音。上を向いてポーンと歩いていた僕はその音が一瞬何なのか分からなかった。

慌てて前を見ると、僕の歩いている歩道に突っ込んでくるトラックの姿がそこにはあった。

咄嗟のことに体が動かない。運転手の驚いた顔や先程から聞こえるブレーキ音からして、故意ではないのだろう。居眠りでもしていたのか、はたまたトラックに異常でもあったのか。

なににせよ、もうトラックは僕から数メートルの距離だ。意外にも思考は冷静で、走馬灯なんでもも見えない。勿論逃げ出したいのだが、頭の中が冴えるばかりで、僕の足は動かし方を忘れてしまつたかのように微動だにしない。

目の前にまでトラックが迫り、もう駄目だと目を瞑る。それから、頭の中で数えてたつぷり三秒。今だに訪れない衝撃に

薄く目を開けると、トラックが僕からほんの一メートル程離れて止まつていた。

おかしい。いくらブレーキをかけていたとはいえ、車は急に止まらない。トラックのような大型車であれば尚更だ。

理由は全く分からないが、なににせよこの場所は危ない。そう思つてトラックから離れようとしたが、足が動かない、先程の様に足がすくんでいるわけでもないのだ。

辺りを見回そうとしたが、首を動かすことも出来なかった。視界内をよく観察してみると、今この状況が非日常であることを否応なく認識させられた。

世界が止まつているのだ。風に吹かれる稲も、空の上の雲も、遠くに見える木々も、何もかもが固まつている。

どういうことだ、何が起つている。混乱する思考に終止符を打つたのはカランという木とアスファルトがぶつかった音だ。ぎよつとして意識を目の前に戻すと、そこには小さな少女が立つていた。深緋の着物を身に纏い、手には朱色の傘が握られている。濃い赤系統の配色と少女の白い肌のコントラストは目が覚めるような美しさであるが、それと同時に得体の知れない妖しさを漂わせていた。

「傘は如何ですか？」

突然現れた少女をまじまじと見てみると、少女が口を開いた。先程までは一本しか持つていなかったはずの傘が、今は二本に増えている。この子は何なんだ。あまりのことに理解が追いつかない。

「それほど身構えなくとも結構。私はしがたない傘売りで御座います」

何が傘売りだ。そんな場合ではないことくらい分かるだろうに。だが、今この場所で平然と動いているということは、この子が時間を止めたのだろうか。もしかすると、助けてくれる？ しかし、此方のことを考えているようには見えない。

「き、君は、一体何なんだ。傘の話は後で聞くから、とりあえず助けてくれないか」

「傘とは即ち守るもの。それが雨であれ、日の光であれ、目の前のトラックであれ、やってやれぬことは御座いませぬ」

僕の言葉に耳を貸さず、彼女は続ける。しかし、彼女の弁を信じるならば、傘で目の前のトラックを止められるということになる。

俄かには信じ難い話だ。しかし、この奇妙な現象を目の前の少女が起こしているのだとすれば、彼女の持つ傘が不思議な力を持っていても不思議ではない。

要するに、彼女は傘を買えば命を助けてくれると言っているのだろうか。それならば是非もない。たとえ眉唾だったとしても、失うものなど無いのだから。

「分かった。分かったよ。買えばいいんだろう？ どうせこのままだと死ぬしかないんだ。命が助かるのなら幾らでも払ってやるさ」

「いえ、御代は結構。お好きな傘をお持ちください」

そう言っただけで彼女は両腕を広げた。いつの間にも用意したのか、細い双腕は吊るされた傘で見えなくなっている。

和傘、洋傘、雨傘、日傘。多種多様な傘がある。しかし正直な所、傘など何だっただけで良い。傘が欲しいわけじゃない、命を落とすだけなだけなんだ。

僕は適当に、少女の右腕の端に吊るされている紺色の洋傘を選んだ。理由は特に無い。強いて言うならば、目に付いたからだ。

「本当にこの傘で良いのですね？」

「命が助かるのなら何だっただけでいいさ」

「……まあ、承知いたしました」

傘が現れた時と同じく、僕に認識出来ないうちに選んだもの以外の傘が掻き消える。

少女が柏手を打つと、僕の手は傘が握らされており、肩から先だけが動くようになっていた。そしてそれと同時に、赤い着物を着た不思議な少女は姿を消していた。

腕が動くのはトラックが止まっている間に傘を開けということだろう。そう思った僕は柄に手をかけ、紺色の傘を開……………けない。

どうしてなんだ。何が悪い。思い切り力を入れて傘を広げようとするが、びくともしない。何故だ。何故だ。助けてくれるんじゃないのか。混乱した思考の中で必死に腕を動かしても、傘布が揺れるばかり。

そうやって奮闘していると、不意に音が戻ってくる。風の音、ブレーキの音、それらに負けないくらい大きい自分の心臓の音。トラックが近づいてくる。逃げないと、逃げないと、逃げな——

▼

「傘は守るもので御座います。物であり者、貴方が貴方を守るのではありません。傘が貴方を守るのです」

曇り空の下に少女が一人。深緋の着物に身を包み、手には朱色の傘が握られている。そこにあるのは、件の少女とブレーキ痕、赤黒い血に塗れた紺色の傘。そして、哀れな少年の亡骸だけだ。

「いけませんねえ、指運で傘を選んでは。貴方が傘を選ぶのではなく、傘が貴方を選ぶのです」

少女は優しく労わるような手付きで紺色の傘を拾い、掌でさつと撫でると全ての血痕は消え元来の色を取り戻す。それを見て少女は優しく微笑し、数瞬の後に紺色の傘は見えなくなる。首を傾げたくなるような光景だが、彼女にとっては茶飯の事なのだろう。

「まあしかし、貴方のような御方を選ぶ傘が居るかどうかは、今となっては分かりませんがね」

楽しげに呟いた少女は朱色の傘をくるりと回し、少年が傘を持つて行った竹林の方角へと歩き出す。カラン、コロン、と響く下駄の音は段々と小さくなり、やがて、消えた。

了

## あくまでねがいをかなえたはなし

キリギリス

悪魔がいた。

悪魔はあるとき、少年に取引を持ちかけた。

どんな願いも叶える。ただし、願いは三つだけ。

変わり映えのしない日常に退屈していた少年は、突如訪れた非日常に心を躍らせた。

まるで物語のような展開。金、女、名誉。ありとあらゆる富が手に入れられる可能性が目の前にあった。

その富に目が眩んだ少年は、悪魔にこの世の全てを寄せせと叫ぼうとして、すんでのところで思いとどまった。

いやいや、そうではないだろう。

自分はそんなつまらない願いを叫ぶような平凡で愚かな人間ではないだろう。

思春期特有の過剰な自意識から、少年は、「他人とは違って賢く、チャンスをもノにできる自分」は何を願うべきかを思索した。

そして、じっくりと考えて出した結論を、尊大な口調で言い放った。

「おい悪魔。この世界の幸福と不幸の割合を半々にしろ」

そのようになった。

翌日、少年は悦に浸りつつ朝食を摂っていた。

友達に何と言って自慢しよう。昨日の出来事は歴史の教科書に載るべき偉大な所業だ。

自分の願いが世界を変えた。この不幸だらけの理不尽な世界を、あるべき姿に戻してやったのだ。

希少な権利を己のためでなく、世界のために使う。

言うだけならば簡単なその偉業を、実際に為せる人間が、この世界にどれだけいる？

にやついた顔でトーストを齧っていた少年は、前触れなくテレビから響いた爆音に驚き、むせ返った。

混乱しつつもテレビに視線を移すと、そこには信じがたい光景が映し出されていた。

それは、人の形をした獣の群れだった。

武器を振り回し、市街を破壊する暴徒たち。逃げ惑う人々。響き渡る悲鳴と子供の泣き声。銃声がひっきりなしに響き、人が次々と倒れては動かなくなっていく。

今、転んだ少女に嗤う男が近づいて、凶器を振り下ろした。

動かなくなった少女に馬乗りになり、何度も何度も腕を振り下ろす男。その下から、じわじわと赤黒い水溜りが広がっていく。

なぜテレビでこんな映像を流している？

少年の知る世界はこのようなことを許す訳がない。彼はこみ上げる吐き気を堪えながら、助けを求めて隣で食事をしていた父親を見て、凍りついた。

父親は平然としていた。テレビを横目に眺めながら、イチゴジャムの塗られたトーストに齧りつき、時々コーヒーを啜っていた。

少年の視線に気づいた父親は、土気色の顔の少年を見て血相を変えた。

「どうしたんだ!? 顔色が悪いぞ! どこか具合が悪いのか!?!」  
 「父さん、なんで平気なんだ。テレビで人が、人が殺されて……!」  
 「人? ああ、さっきの女の子か。確かに可愛いそうだと思うが、いつものことじゃないか。そんなことより、どこが痛いんだ?」

少年は寝巻のまま、裸足のまま家を飛び出した。

人が死ぬ光景がテレビで流れるのが、いつものこと?

馬鹿な。そんなはずはない。そんなことがあってたまるか。

錯乱した少年は、足が血だらけになるのにも、すれ違う人々から冷たい目で見られているのにも気づかずに、通学路を駆けた。

走って、走って、走って。体力が尽きて少しも走れなくなつて、ようやく少年は走るのをやめた。

ぜいぜいと荒い息を吐き、立っていることすらおぼつかない。極度の混乱によつてごまかされていた足の痛みが、跳ねる心臓の音に合わせて精神を削る。

それでも少年は歩き続けた。考えすぎて焼き切れそうな頭を抱え、見慣れた道筋をひたすら歩いた。たった一瞬でも足を止めたら、発狂したまま戻ってこられない気がした。

そうしてついに、少年は退屈な日常の象徴ともいえる学校へと辿り着いた。

辿り着いたはずだった。

「……ああ、嘘だ。嘘だこんなの」

うめき声が少年の口から漏れた。

学校は無かった。

正確に言えば、無いと言つて過言でないぐらいに壊れきつていた。白かった壁は爆撃にでも遭つたかのように煤けて穴だらけで、グラウンドはどこどころが抉れ、そこらの空き地のように草が生い

茂っていた。

少年が思い描いた、あのぬるま湯のような日常の影は、もうどこにも無かった。

心が折れ砕け、膝から崩れ落ちた少年の体を、誰かが支えた。日に焼けたその手は力強く、温かく、

獣のような臭いがした。

少年の体を複数の男の手が押さえつけた。

咄嗟のことに声も出ない少年を、男たちは軽々と抱え上げ、手慣れたように車に放り込んだ。

男たちが乗り込むや否や車は動き出す。想定されていない急激な加速に、大型の乗用車が悲鳴を上げた。

抵抗すらできず、猿轡をかまされ、手足を縛られた少年の耳に、男たちの下卑た笑い声が届いた。

「こいつはいい拾いモンだ。俺達はツイてる!」

「ああ。頭がいつちまつてるようだが、肌艶がいい。どこぞの金持ちのガキか?」

「じゃあどうする。身代金と代えるか、内蔵を売つ払うか」

「どうせイカレたガキだ。あの爺に売るのはどうだ」

「あの気味の悪い屋敷の? そんなに高く売れるのかよ」

「噂じゃあ年頃のガキを集めてきては毎日殺してるらしい。何人いても足りねえんだと」

「んなことはどうでもいいんだよ! こいつで出来た金は山分けだ。俺の分の金を盗つたらただじゃ済まさせねえからなッ」

少年は嫌でも知れる自分の未来に血の気が引いた。そんな死に方は嫌だ。死にたくない。死にたくない! 少年は目を瞑り、心の中で叫んだ。

（助けてくれ！ 誰でもいいから、俺を助けてくれ！）

突然、男たちが慌てだした。

「なんだコイツは！？」

「どこから入って来やがった！」

その声を聞き、少年が恐る恐る目を開くと、

悪魔がいた。

悪魔は、少年に取引を持ちかけた。

どんな願いも叶える。ただし、願いはあと二つ。

少年の口をふさいでいたはずの猿轡は、いつの間にか無くなっていた。

願いの貴重さも、くだらない見栄も忘れて、少年は叫んだ。

「助けてくれ！」

そのようになつた。

気がつくど、少年は自宅の前に立っていた。

走り続けたことによる疲れも、耐えがたい痛みを発していた足の怪我也、手足を縛っていた縄も、まるで最初から無かったかのように消えていた。

しばし少年は放心していたが、自分がいかに危険な場所にいるのかを思い出すと、よろよろと自宅に駆け込んだ。

少年の両親は心の底から安堵したようだった。もう助からないだろうと思っていた息子が、五体満足で無事に帰ってきたのだから。

それは人の親として当然の反応といえるだろう。

しかし、少年にはその両親の反応に吐き気を催した。今の彼には、ごく普通なその姿が、ひどく醜いように思えて仕方がなかった。

「ッ！ 母さん！ 帰ってきた！ 帰ってきたよ！」

「おかえりなさい……！ よく帰ってきてくれたわ！」

「ごめん、少しだけ一人にさせてくれ」

少年は寄ってくる両親の間をすり抜け、一直線に自室に向かった。困惑する両親を置いて自室に入り、ドアの鍵を閉めた少年は、ドアを睨みながら呟いた。

「悪魔、いるんだろ。出てきてくれ。聞きたいことがある」

そして、少年が振り向くと、

悪魔がいた。

悪魔は、少年に取引を持ちかけた。

どんな願いも叶える。ただし、願いはあと一つ。

少年は深呼吸をして、悪魔に問いかけた。

「とりあえず、願い事とは別に聞かせてくれ。今までお前に、『この世界をもっと幸せにしてくれ』と願った奴はいたのか？」

悪魔の答えを聞き、少年は自嘲の笑みを浮かべた。

「……そうだったのか。ああ、馬鹿だなあ、俺」

少年は俯いて黙り込んだ。そして、次に顔を上げた時、少年の目には縋るような色があった。

「なあ。願い事が決まったよ。叶えてくれ。」

俺はこんな世界になんて二度と来たくないし、覚えていたくもない。だから。

俺がお前と出会わなかったことに、そしてお前と出会うことがないようになんてくれ」

そのようになった。

少年が自室で友人と遊んでいる。

友人は携帯用ゲーム機に苦戦していて、少年は今日発売の週刊漫画誌を読んでいる。

ゲーム画面を睨む友人の顔がだんだん苦しくなっていく、ゲーム機から安っぽい爆発音が鳴った。

「あーっ！ また死んだっ。おい、これどうやってクリアするんだよお」

ゲームオーバーにでもなったのか、友人がゲーム機を握りしめたまま少年に泣きついた。

読んでいた週刊誌を閉じて、自分にまわりつく友人に視線を移した少年は、無言で手のゲーム機を奪い取る。

そのまま慣れた様子で操作しだした少年に、友人は慌ててゲーム画面に集中した。

少年はゲームを続けたまま、画面にくぎ付けになっている友人に話しかけた。

「今週の新連載、どう思う？ 俺はハズレだと思うね」

「えっ、うお、すげ、えっ、おお」

「聞いてんのか」

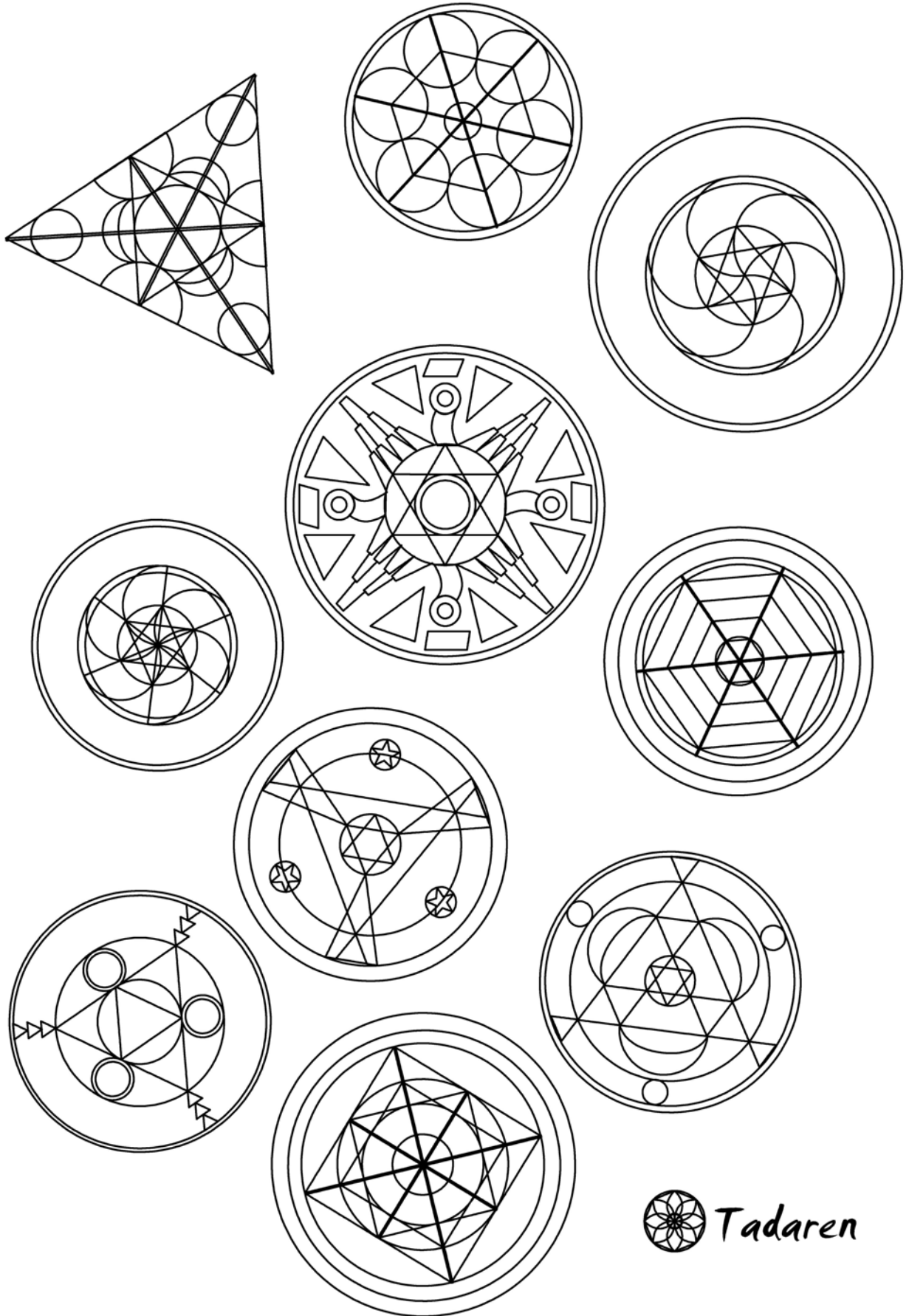
「あ、ああ、アレな。おれは展開熱いし、絵がかっけーし、面白いと思っただぜ？ なんでハズレなんだよ」

「だつてさあ」

「今どき悪魔モノって。契約って。ありきたり過ぎてつまんねーよ」



# イラスト ト 作品





こんにちは  
はじめまして！

現視研でイラスト班1年としてがんばってるのですが、けれどご存じの方いませんよ。ね。今回は初参加なので当然ですね。改めてねこにゃんです。今回はこの会誌にこのような形で関わらせていただけてすっごく幸せです！

現視研1年  
ねこにゃんでした。  
これからも頑張ります。

*illustration : Claude*





ぶっちー



*Chige*







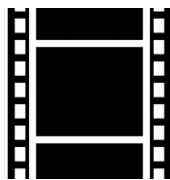


illust:クロム

# 現視研紹介ムービー制作

こんにちは、いろいろなことをやってるちげと申します。現視研が、今年で十周年だそうで、部活の紹介ムービーを制作する企画が立ち上がりました。そのことについて、少し書かせて頂こうと思います。動画制作とあって、絵や小説ゲームなどとは違う、現視研内では新しい取り組みとなりました。そのため、色々と準備が必要でした。

まず、動画を制作するためのソフトですが、AviUtlというフリーソフトを使わせていただきました。簡単な動画編集には最適なソフトです。しかし使いこなすと、無料ソフトとは思えない高度な編集が可能です。動画投稿サイトなどでは、よく耳にするソフトですね。このソフトの製作者様には感謝、感謝です。



▲AviUtlのアイコン

次に素材についてです。BGMや、紹介するときに表示する小説、絵などをそれぞれお借りました。ありがとございます。

- 小説 小刀 「天体観測」より抜粋
- 音楽 Kiri 「VividColor」(一部カット)
- イラスト クロム 「絵描きJK」
- ゲームのソースプログラム 古月爪有 「Runaway」

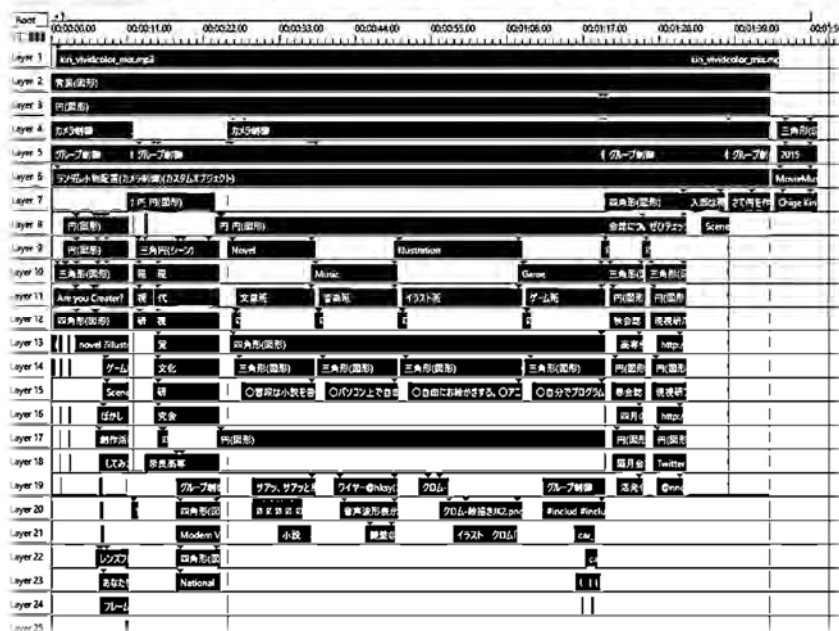
続いて編集についてです。この動画は基本的には音楽に合わせる形をとったので、曲を聴きながら構成を考えました。どこでタイトルを入れるか、どこで部活内容の紹介をするかなど、流れを崩さないように注意しました。

こちらが編集画面です。少し見にくいですが、横が時間軸、縦がレイヤーになっています。ここに文章や画像などの素材を追加していきます。またこれらをクリップすると個別の設定ウィンドウが開き、大きさ、透明度等の設定や、アニメーション、効果等を追加したりすることができます。テレビ番組などももっと高度なソフトですが、同じような方法で作成されています。

編集したものは、レビュー画面で確認

できます。ただ、効果やアニメーションがたぶんついていないような場面では、パソコンのスペックが足りず、表示がカクカクすることがあります。

そんな場合は、一度動画をファイルに出力してみましょう。このことをエンコードといいます。エンコードすることによって、いつも皆さんが見ているような動画ファイルに変換されます。



このように、一見難しそうに見える動画編集ですが、慣れると大したことありません。無料なので簡単に手に入り、手軽に作れるところがいいですね。皆さんもこれを機に、動画編集に興味をもってくださったらと思います。

## カードを高速回転させる講座

タカト

みなさんはカードを回転させたことがありますか？カード手裏剣として投げて遊んだ、と言う方はちらほらいるかと思いますが、モーターを使ってプロペラのように回転させたことのある方は滅多にいないと思います。この講座ではモーターを使ってカードを高速回転させる方法を紹介していきます。カードを回転させる理由も目的もありません。ただ、回しているとなんとなく楽しいのです。

カードを回転させるための装置をカード回転マシンと呼びますが（そのままですが…）。まずこのカード回転マシンを作っていきます。一つ目はモーター。このマシンの核であり、一番個性の出るところです。回転の速いものにする、回転数の変えられるものにする、トルクの強いものにするなど、ここへのこだわりが完成品の出来を左右するといっても過言ではありません。

二つ目は電池ボックス。スイッチのついていない簡素なものを使ってもいいですし、スイッチがあるものや入力切り替え可能なものの凝ったものを使ってもかまいません。

三つ目は本体。流石にむき出しのモーターから導線をたらしただけのままカードを回転させるわけではありませんので、適当なものにモーターと電池ボックスを固定させる必要があります。ここにも各々の個性を發揮することができ、ジョイント部を動くようにしてモーターの角度を変えたり、折り畳みにしたり、ベルトを取り付けて腕時計型にすることもできます。

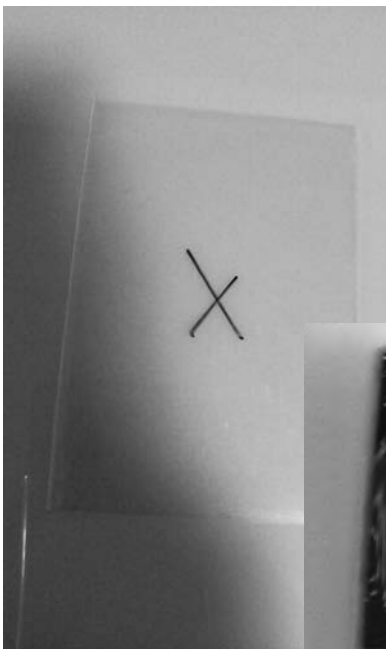
また、カードプロテクター（スリーブ）を使うことで、カードに直接接しなくていいうえ、カードの脱着が楽なため、よりカード回転を楽しむことができます。

「こだわりなんていいからとりあえずカードを回したい！」という方にはおすすめの商品があります。それは百円ショップで手に入る

ハンディ扇風機です。この商品はモーター、電池ボックス、スイッチが一つになっており、カードプロテクターを扇風機の羽に貼り付けるだけでさらにコンパクトという最高のアイテムです。モーターがやや貧弱ですが、入門用には十分なスペックだと思います。前置きも終わったところで百円ショップの扇風機を使ったカード回転マシンの作り方を解説していきます。

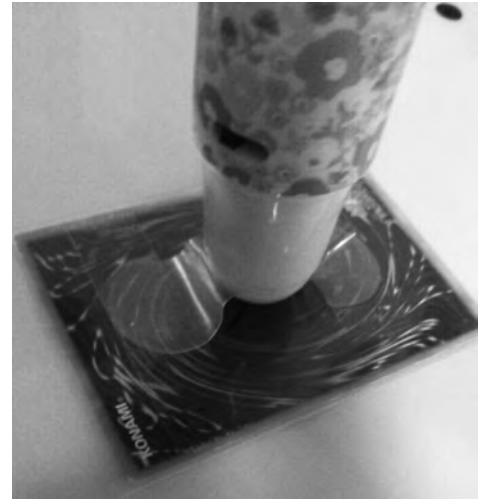
用意するものは百円ショップの扇風機と回したカードに合わせたカードプロテクター、二つを貼り合わせるための接着剤とセロハンテープです。今回プロテクターはスモールサイズのものを使用します。

プロテクターは対角線を引き、中心を出しておくことで綺麗に回すことができます。



次にこの二つを貼り合わせます。中心を合わせて接着剤で貼り、羽をセロハンテープで固定します。接着剤がないと使っているうちにどんどん中心がズレてきますので、必ず使用してください。

セロハンテープが剥がれにくくなるように、上からも一度テープを貼れば完成です。プロテクターに好きなカードを入れて好きな場所で好きなだけ高速回転させましょう！



前述のとおりこれは入門用です。カード回転クラスタたちは日々新しいカード回転マシンを開発しており、高度なものではマイコンを使って回転数を制御するもの、モーターを使用しないものではレゴブロックを使用したハンドル式のものや竹トンボを使ったものなど多々あります。

カード回転は行為自体が芸術であり、マシンに縛りはありません。モーターも電池も使わなくてもいいのです。ここで紹介したマシンもすべて一例であり、あなたのマシンはあなたの個性を精一杯發揮して作ってください。

最後に知り合いのカード回転クラスタさんのブログを紹介させていただきます。今解説できなかった完全自作のカード回転マシンの作り方や、あらゆる改良を施したマシン、さらにはカード回転行為自体に対する考察などが紹介されていますので、カード回転に興味を持った方は是非。

カード回転ブログ

<http://ameblo.jp/nekosamoon/>

それではみなさん、良いカード回転ライフを！

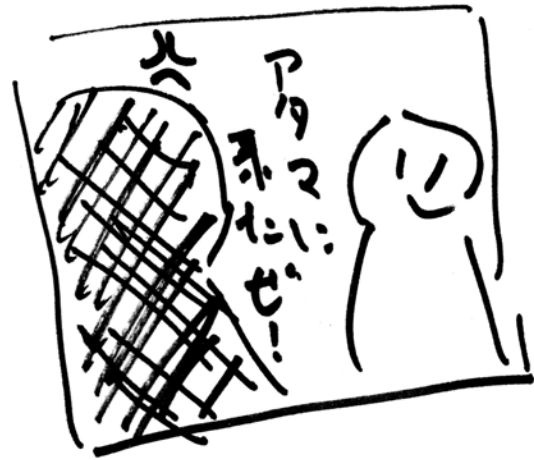


# 無回運云 4コマ by 夕カ-

トサカ



世心



テュラインリン: 首なし馬騎士

## あとがき

みのすけ

去年何もしてこなかった人間の書くあとがきですが、さほど気にせず読み進めてください。としかかすくめんどくさい。

現代視覚文化研究会秋会誌、なげなしのかねを手にとっていただけ、ありがとうございます。この会誌はメンバーの努力が形となったものです。その形は様々ですが、それらを受け取っていただければ幸いです。

今までの人生で初めて、書く、という形で私はこれに関与していませんが、書くことそのものはさほど重要な事だとは思っていません。音楽や文章、ゲーム、そしてイラストなど、様々な形態がありますが、それらはただのツールにすぎないのだと思います。

代表的なものを挙げるなら言葉でしょう。自分の頭の中にあるもの、本当の意味で他人と共有できないそれを、相手に伝える方法の一つです。しかしながら言葉というのは厄介なもので、伝えられる限界があります。上手く伝えられないだけでなく、誤解されたり、真反対の受け取り方をされることも少なくないのです。

だから、その道具を使った結果は最終的に、それを受け取った側の認識に委ねられると言えます。どう見るか、聞くか。それは全て受け取り手次第なのだと思います。

相手に決して伝わらないということは、相手から決して伝わらないことと同義なので、お互いにお互いを深く知らないまま傷つけられる可能性もあります。

ツールとはそういう意味です。私たちの作った作品は、私達の世界が詰まっています。決して正確な伝わり方はしないものの、受け取る人それぞれの世界に、何かを伝えられれば、と思っています。最期にもう一度……手に取っていただいたことに感謝をします。

そうやって彼は拳銃の銃口をこちらに向けた……。

「あなたは知りすぎたんです」

氷の彫像のように冷やかな目で、無感情に見据えた。表情も、目も、果てのない冷たさを帯びている。ぴくりとも動かず、その姿勢を崩さない。

「そもそも気づかなかったのですか？　ここまで読み進めたらどうなるか、ということに」

銃口はまるで、深淵のように覗き込んでいた。真つ暗に穿たれたそれは、夜の暗ささえも超えて、底のない澱んだ闇などと仰々しく形容することですら不適切だ。

「これはちよつとした疑問なのですが、好奇心は猫をも殺す、ということわざがあります。この好奇心は一体誰の好奇心なのでしょう。猫のものなのか、はたまた猫を殺す何者かのものなのか」

口だけを動かして、彼は問う。もともと答えなど求めていなかったのだろう、拳銃の引き金に指はかかったままで。

「……関係のないことですよ。猫からすれば、殺されてしまうことは明らかなのですから」

そう言い、憐れむように目を伏して、それからこちらを見下ろした。

「何事も過ぎてしまえば毒になる、そういうことですよ。こんなになるまで読んでしまうから、こうして私が拳銃を向ける羽目になった」

そう言えば、と彼は思い出したように唱える。

「そろそろ余白がなくなってしまうので、あまり長いこと話せませんね」

彼の構える拳銃が、ドス黒い光を見せる。まるでそれをおもちやであるかのように、軽々しく撃鉄をスライドさせた。最後の猶予が終わってしまった。もう、先がない。

「では、今度は春に」

そして、光が走った。

## あとがきのようになにか

wolf

やっと編集終わったあああああああゝ  
 って感じのあとがきです。

今回も去年とおなじく編集をやりましたwolfです。

今年は綺麗に製版してみようということでwordを使うのをやめてLaTeXで書いてみようとしたけど挫折 ↓ なにかないかなー

ということでフリーソフトの「威沙」を使わせてもらっています。

「威沙」の製作者さんに感謝m(\_ \_)m

(あとAcrobatも使いました)

やはり文字がピシッと揃っているのと揃っていないのでは見栄えがだいぶ違いますね。私も以前はwordでも別にいいじゃん、と思っていたのですが実際に編集でPDFをいじってみると文字列のバランスが気になり脱wordしました。いまだ威沙の虜です。

この「なけなしのかね」と高専祭が現視研の唯一の発表の場なので気合を入れて編集しました！

去年と違って時間がなかったり、体調を崩して時間がかかったりしましたが、今年もすごくいい会誌になりましたのでちゃんと読んで貰えるとても嬉しいです！「ふくん、いいんじゃない？」とか「ダメダメだね」とか言っていただけとさらに嬉しいです。

・ ・ ・

書くことがなくなっただけで現視研ってどんな部活動？  
 っていうのを書いていきます

現視研とは

「現代視覚文化研究会」の略称です。

ノベルとか音楽とかイラストとかゲームとかの現代っぽい創作活動をなんとなくゆるくやっていく感じの部活です。名前だけは某漫画で見たことあるかもしれませんが。

基本は「文章班」「音楽班」「イラスト班」「ゲーム班」に分かれてゆるくのびのびと活動しています。隣で配ってるCDは音楽班の作品で、隣で展示しているゲームはゲーム班の作品です。

今年はやる気のある人が多いらしく、会誌も充実の32ページとなっております。小説班の皆さんのセンスが羨ましい・・・

他にも今年はホームページを新しくしたり、新しくゲームを作ったりとなかなかたくさん活動しております。オタクが集まってグダグダしてる部活じゃないのです！

・ ・ ・  
 うゝむ：他に書くことが：

あつ これを読んでも中学生の皆さん！もし奈良高専に来るんだら現視研を覚えていてくれると嬉しいです。

# 現代視覚文化研究会

表紙：ねこにゃん

編集：wolf

## 参加者

じっそうのひと

TEXTER

フランカー

若葉

ちげ

古月

みのすけ

箱庭氏

小刀

ツリウム

キリギリス

Tadaren

Claude

ぶっちー

Kaiwai

クロム

タカト

みのすけ

奈良工業高等専門学校  
第49回高専祭  
現代視覚文化研究会  
秋会誌



現視研web